女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾七號

當府內無郵稅

一冊六錢

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 167. June 22nd, 1889.

第百六十七號目錄

EDITORIALS:—Hero. Letter to Student's Parents.

LEADING ARTICLES:—Mistakes in Regard to the Recent Woman's Education. by Dr. K. Mitsukuri.

CRITICAL NOTES: — Horidashimono.

MISCELLANEOUS: — "A Word respecting Prof. Kato's Rules of Conduct for Female Students." "A Chronic Disease." "Self-Confidence and Repentance." "A Summer Dawn." "A Decorated Bow." "Sunday."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES.—Marcus Brutus and Porcia.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

社説　英雄豪傑

論説　女子教育論時弊（箕作佳吉）

批評　篁村先生の「堀出し物」（藤の屋主人）○新著百種第二號堀出し物の評（寥々子）

雜錄　讀加藤博士の女學生心得○百年の痼疾○入るゝ箱の進化○威張て見たが悔るは是れ君子なり○初夏のあかつき○銹れる弓○おとめロアーリー○日曜日○神の惠○茶話四

兒籃　乙女亞利斯（破月子）

史傳　ブルータス及其賢妻

小說　あるのん物語（美妙齋）○貝才子（麻溪）

寄書　學成りし女子の都に留るはよろしからず

開書　舟中夏月（林甕臣）

時事　寧ろ全廢せよ○高等女學校全廢の風說○婦人白標倶樂部○其他十一件

片々　記章佩用允許○白十字社の發起○外十二件

外報　女子絹業協會○女子被撰擧權の有無

WOMEN IN JAPAN.

(1) *A new Industrial School is being planned by Mrs. Shige Taneda, Mrs. Toshi Kato and Miss Mine Mizuno. This work of giving Japanese girls opportunity for getting an education, while working for their independent support, was begun with a few pupils in connection with "Sakurai-Gakko." The above named ladies with the assistance of many benevolent ladies among the noble families, are preparing to carry on the same work on a larger scale.*

(2) *Mrs. Kei Okami, lately graduated from the Medical College in Phil. Pa. has recently come back, and Miss Kin Kato formerly sent by the Woman's Normal School just now come back.*

(3) *Petitions in regard to Monogamy are being sent in to the Senate (Genrōin) through local governments. One from Kyoto was sent in the name of a Toyo Shimizu.*

(4) *The collection taken up together with the result of the Kōto Jogakko musical exhibition for the benefit of "The Blinds' and Mutes' Asylum" was 801 yen 68 sen.*

(5) *Among the votary offerings made to the great temple in Kyoto is a rope about 7 inches in diameter and 31678 feet long. The peculiar feature of this rope is that it is wholly made of the hair of women said to be 353883 in number all under 20 years of age.*

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

時論

○女學生の父兄に與ふるの書

近頃ろ府下女學校の事に付ての評判甚はだ騷々しく天下悉く目を側らにして此の一點を注視するの次第と相成候に付きては其愛娘を女學校に於て學問せしめ玉ふの父兄特には遥かに之を府下に送りて遠く其成功に懸念せらるゝ各地方の父兄方には定めて府下各女學校に關する晩近の風聞を聞きて御心配一と方ならずと察し候、依りて少さか愚考する處ろを述べ多少尊襟を安んずる所あらば幸はひならんと存じ候。

申す迄もなく物は一二の不出來によりて全躰を無すべき筈に無之、彼の先祖代々の遺法を守りて熟練比類なしと自慢する老農の田畠に於てすら米麥の中に多少の稗粃を生ずるは勢ひの免れがたきことゝ申し候、夫故古しより坊守を惡みて袈裟を惡むと稱し一の不平を推して他の罪なきものに迄で及ぼすを論の尤も不條理なるものと致す、然るに只だ一二の失策によりて擧て全躰を非難し之よりして味噌も泥も玉も瓦も殆んど之を判別するに遑まなく悉とく之を同一に放擲し去らんとするは不所存至極の儀と存じ候、如此きは猶ほ肥田濱五郎君の不幸によりて鐵道は危なきものと云ひ森大臣の刺殺せられしによりて出刃庖丁も矢張廢刀せしめではと主張し賄賂事件の沸騰したるによりて議會の効能を皆無にし新聞紙が時に無根の惡評を流布するによりて寧ろ新聞紙は悉とく無きに若かずと云ふものゝ如く殆んど論ずるに足らざることに候、然るに今まや一女學校に起りたる多少の不評判により但し一女學校と申しても只だ僅かに其中の一二人の不評判により然も之れすら殆んど取止めなき推察よりして起り來りたるの不評判によりて直ちに以て其女學校全躰を惡むは愚ろか更に之よりして女子教育の全躰を惡みて女は寧ろ學ばざるの昔しに越ゆるなしと議論するに至りては、寧ろ之を卑怯なりと申すべきか又は臆病なりと申すべきか果た馬鹿氣たりと申すべきか必竟世間普通の人事を承知したる本氣の覺悟とは思われず候。然し之は一二の弊害をすら大層に心配するものにて云はゞ注意の極めて親切なるものと見做しても宜しきことなるが、然らば其の一二の弊害なるものは果して實際に之れありしとなるかと切問すれば誰れとて明白に口答するものはあらず、之を直ちに問へば明白に口答する能はざる事柄を新聞紙上に書く

ときは尤も大業に言觸らすと云ふと抑そも文筆に任ずるものの道德に適ふべく候か小生は甚はだ疑ふものに候。凡そ物は言ひやうに由りて角も立ち丸るくも聞え又おかしくも覺ゆるものに候、例へば文部大臣が良妻賢母を造れよとありし高等女學校の敎頭及校長にして其の生徒の爲に良緣の口を覔るは至極適當の事なり何も不思儀の所行とは思はれず候へども之をチカシク言まわし○△を附して暗に種々の思を想像せしむるときは如何に平氣なる讀者の心にも油然として種々の疑念を生ずるものに候。故に生は彼の高等女學校々長が平素餘り人にスカレざる言葉を放言し同じく敎頭が事々飛離れたる異常の所行を爲さるゝの僻ありし之を支那風に申さば共に磊落なり通俗に申せば互に氣が付かぬと云ふの一失ありし上に和樂會の舞踏の風說、陛下行啓の折の生徒の評判記、濁世と云へる推察的の小說など、續々と世人の注意を惹き來りし折柄俄然天外より千古の一奇文落來りて國の基と云へる雜誌に現はれしかば扨ては饑渴く如くに種を懇望したりける新聞記者の筆は一齊に此時節題に向ひ、初めは常談半ばの雜報も萬犬の爲に實と傳へられ、喩へば坂を下る車の如く、行掛りの喧嘩の如く、想像は想像を辨じて更らに想像を生み、今日は明日の種となりて明日は一層の風說を流すの次第となりぬ。既に如此くなりし眼を以て物を見ればスヽキも幽靈と見へ申すべし而して其幽靈と見ゆるは唯に慧眼なる新聞記者の眼にのみ見ゆるにあらず彼の推察力に富める女生徒彼自身の集り場所に於ても見ゆべく其見ること彌よ烈しくして耳語は口語となり口語は亦た人の耳に聞かれて遂に新聞記者の兎耳に入り來り此に於てか全く証跡あるの探報ありとして翌日は一層の勢ほひにて書立らる。凡そ風說一旦斯の如き景況となるときは最早火の手の衰ふる見込なし日に益す流行して遂に此頃の大評判大恐慌と迄に推し進めたる由緣に候。

故に生は眞實に今の評判を信じ申さず又自から穿鑿しても殆んど其種を見出さゞるに苦しむものに候、御承知の如く生は嘗て總理大臣閣下に對する惡風評熾んなりしときも別段人に掛念したる言論を致さゞりし樣に記臆し又舞踏會男女交際論等に對しても少さか輿論に反對したる意見を公にしたるとあり決して惡事を隱くし又は議論を曲ぐる等の事を好み申さず常に暴露主義の有効を知りてナデツケ手段の姑息なるとを

信じ申すに付去年は我國の弊風を事によらば外國新聞紙にも訴へんと申せしにより貴女之友と云へる雜誌より大層叱られしとすらあり凡そ自分の諍言は無効なるかは知らねども自ら信ずる所ろは常に敢て事實を曲げずと存じ候、然るに今の諸新聞紙の評判の如き大層なるとは決して之れなし此等は或は邪推により或は心配すぎにより或は製造により或は一宗の人の投書によりて斯く八釜しく相成りし事と存じ候。

左りとて生は高等女學校の教育法に感服するものにあらず若し卒直に申せば種々の不同意の點あれども只だ其の不同意の點とする所ろ決して今の時論の如き所ろには無之、又矢田部君に對しては其辭職を勸告し野ノ勢君に對しては其暴論に不同意を表すると既に前號に記載せしが如しとは云へども抑そも如此く言ふの眞意に至りては大ひに時論と相違せり其は本誌數號前來の記事論說を通觀せられたる人の能く承知せらるゝ所ろならんと存じ候。將又今の各女學校に對しては何如ん今の女生徒の風儀に對しては如何んと問はるゝときは固より不完全の事甚はだ多しと信ず啻に不完全のみならず實に憂ふべきと甚はだ多しと信ず此等の事に付ては決して多くの論者に劣らざる程に懸念する所ろに候、例へば女生徒の若干が下宿屋に居ると云ふ事女生徒の多少が生意氣になれりと云ふ事又女生徒の幾分が浮たる交際會を悦こぶと云ふ事の如きは確かに之れあるの事實にして夫は言ふ迄もなく生等が夙に論辨し勸告して或は不同意を表し或は警戒したる所ろ何も今日事新らしき義には無之候。然し下宿屋に居る女生徒は京濱間學生の万人中の百位ひなるべし（而して之は無論不穩當の行跡ゆへ固より速かに止むべきものあり）、生意氣云々は教育の或る時代と或る仕組の下にては何如やうなる人間にも之れある所ろ何も女生に限りたるとにあらず、交際會云々は去年頃よりは大ひに減じ殆んど消滅せんとするに近き次第に候。然し若し此等の弊害が今日に於て尤も盛んなりとするも左らば之によりて女生徒は教育せざるの昔しこそ床しけれと論ずるに至りては實に事物の進步と進步の道に横はる普通の故障とを辨ぜざるものゝ言と思はれ何如にも開化せる論者の口より出づべき論法とは受取れざるやう存じ候。

然し右に申たるとを一々非決し假に先今の女生徒には實際新聞紙に言る如くに甚しき不行跡之有れりと想像いたし、所云

る或る女學校にて女生より先生に歌を呈したり又或る所にてに月黒く木茂れる邊に男女雙々運動したりと云へるの事實を悉とく實際にありしとと承知いたしつれはとて、之にて女子教育を無みするの理由は毛頭之れあらざる義と存じ候。凡そ何如なる女性にても彼の演劇淨瑠璃本などにある如く先づ其口よりして男子に向ひ彼此云ふものは殆んど之れなく大抵男子のそゝのかしによりて遂に不埒なる事をも仕出かすものに候、況んや女生より直ちに先生に奇しき歌を呈する如きは實際決してあるを得まじき義にて如此き時は先生たるものゝ品行に於て先づ之を招く所ろあるに由るとに候、況んや彼の男女雙々相ひ手を牽く塲合の如きにても女性先づ男性を招き出し導びき出し引ぱり出すなどの事は決して之れあるまじく矢張り男生の之をそゝのかすに出でたると明白に候。然らば何れの塲合に就て考ふるも男女間不行跡の發頭は大抵男子にあり即はち男子先づ不品行を仕掛けて後ち女性の之に誘わるゝものゆへ此の點より言わば男子は反つてエバを迷わすの惡魔となりし由來あり。左れば斯る不行跡あるとき若し之を改めんとせば即はち先づ男子をこそ矯むべし、若又罪の重きを責めんとせば第一に男子をこそ責むべけれ、之を大目に見れば少なくとも必らず男女を同樣に責むべき筈のものに候、然るに實に奇怪なるは斯る時に常に男子に頓着せず、直ちに女子を責め、斯の次第なれば女生の外出はあしゝ學問は宜しからずと云つて悉とく罰を女子の一身に課するは何ぞ、恰かも罪の發頭を置いて其の末類を殺ろすか又は同類を問はずして其の一人を嚴罰するが如し、更らに喩ゆれば門外に病犬を飼ひ家内の人の用事止を得ずして外出する途端に之に嚙まるゝときは扨てこそ其の覺悟宜しからざるに由れりと申すに均し、不道理も亦た甚しきものと存じ候。

但し此は議論のみを申すにては之れあし凡そ斯る出來事によりて女子教育を全廢せんとするは啻に其の不道理なるのみにあらず實に若し之を全廢せば彌よ彼れが如き罪惡を消滅するの機會全く之れなかるべしと思ふの故に候。諺に女は愛せらるゝとを愛すと申すとあり即はち總ての女は人に愛せらるゝとを何よりも幸福と思ふのみか己を愛し呉たる人に對しては何か大恩のあるやうに感じ乍まち心を傾むけて其人を信じ、次に親しみ、遂に亦之を愛するに至るの情あり實に氣の毒な

るお人よしとは云へども普通の女性には是萬人必具の天禀たる所ろに候、然るに教育なき婦女子に至りては此の弊特に尤も甚はだしく既に他より愛せられ之に切なる言葉を以て言迫らるゝときは最早之を謝絶するの勇毛頭無之、啻に勇なきのみならず之を謝絶するは殆んど不信切の樣に思ひて忽まち之に聽るし則はち輕々しく一身を托するの承諾を爲すと實に少なからずと存じ候、然るに此の婦女子にして一旦教育を受け既に確乎たる精神を受け又た既に確乎たる理想を立つるに至れば自ら望む所ろも亦た確乎として隨つて人に許す所ろも決して容易ならず所謂る毅然たる女丈夫の膽力覺悟を得ると驚ろくべき程に候。故にたとひ男子の不德は百年進化するとなくして今の如くにてあるとも若し女子の教育にして大ひに進み女性特得の信仰氣節貞操等大ひに確固たるに至らば最早男子の無禮なる迷はし誘ひに應ぜざるは勿論、更らに男子をして畏懼しつゝ之に愼しましむるほどの次第と相なるべし、故に男女間の弊害を消滅する最良の策は先づ女子に十分の教育を與へ之に確乎たる覺悟を授くるの一事にありと存じ候。左れば今の小弊害に恐れて乍まち女子教育を中止し再たび之を元の箱の内に納め去らば成程此の雛人形の外氣に當りて破るゝとは或は其間丈け止み申すべし、然し向來何時にても復び之を出すときは亦何時にても同樣の破れを受くべく永世決して際限なかるべし、其上箱の内には亦箱の内の虫ありて外氣に破られざる代りとして別に之を傷つくるものも之れ有り候半か決して安心なりがたきことと存じ候。

右樣に申せば父兄足下の内或は亦た下の如くに述懷せらるゝ向もあるべし、即はち斯る女子教育全體の進歩は成程向來の爲には大ひなる國益ともなるべく甚はだ喜ばしき次第なれども左りとて其公利國益を望んで吾が愛孃を危險の淵に近づかせ之を犧牲に供へて男子の品行を改むるの良方便となす如きは好まざる所ろなり、特に彼の精神を確固にし覺悟を十分にするなどの工夫は必らずしも今の女子教育にのみ依るべきにあらず寧ろ昔しの仕付方こそ反つて適當したれ女德の貞操烈義は遙かに古しへの女大學教育の方に多かりしと思はるゝに付かた〲危なき氣を侵して今の女學校に入るゝに及ばず此際ます〱兼ての所存を確かむるとて則はち今まで女學校に入れたるを退學させ、漸やく喬木に登りかけたるを再たび

幽谷の谷底にひそめ、之れを第二の箱に入れて昔しながらの壓制教育に復せしむる方々も出來候半か、斯ありては御不所存之よりも甚はだしきとあらずと存じ令孃の爲に痛たく歎息可仕候。成程精神を確かにし覺悟を定め所謂る貞操を固からしむるの仕付に關りては昔しの教育のみにて少さか不都合之れなく寧ろ今の或一流の教育法に比較しては反つて優るあらんかとも存じ候へども左りとて之丈けの教育にては令孃今后の一生涯その難義せらるゝ所ろ實に莫大ならんと存じ候、何んとなれば誰が考へ候ても此の日本の文明は向后ますく開らけ行くものと信じ毫も疑ひ申すまじく即れち西洋人との交際も隆んにあり邦人同士の交際も更に一層盛になり何如なる奧さまにても家にのみ引こもり居るとはどうしても出來ざるとと相成るべし、扨て既に外に出でゝ人に交際するとなれば常に口を緘して無言にて居るとは出來ず、既に無言を開ひて何かを談しするとせば最早お薩お芋のはなし耳にては埒あき申すまじ。但し此頃の交際ならば或は之にても相濟めども之より五年十年の后、即れち今の足下の令孃達が恰かも盛年とならるゝの時代と相成れば最早如此きとにては決して通用いたすまじと存ず、此は豫言者にあらずとも確かに知れたるとにて生は何如なる大なる判をもつきて保證する所に候。凡そ此二三年にて女性の景況の進歩したると實に古今無類の樣にて顧みて數年前と今日とを較ぶれば實に喫驚すべきほどに相見へ候へども思ふに今后の數年の變化は更らに一層の變れりあらんと想像いたし候、何んとなれば此迄は矢張り天保時代の御婦人が多少西洋風に急變りせられたる迄の變化にてありしが、此后四五年を經即れち過る三四年前より稽古したるに合せて都合八九年の學問を爲たる新時代の女生が續々と社會に出らるゝの日に當りては婦人社會の景況俄然として大革命すべしと存ずれば也。左れば此迄よりも更らに一層の甚しき變化を爲し婦人同士の交際及び婦人と世人との交際も大ひに變化すべき時代の極めて近く近づき來るに拘れらず、今日に於て乍ち愛孃を文久慶應以前の舊教育に復し他日彼の婦人社會大革命の全く成就する大變化の時節到來の日此の愛孃を殆ど時世に適せざる盲目人として出世せしむるは果して父兄たるものゝ慈悲に候半か、現に今日にてすら多くの有爲なる婦人方は悲しくも人に向ひて歎息せらるゝやう妾等は親

供が舊弊にて何にも教へくれませなんだゆへ皆無文盲にてお談しも出來ずと、常に親を冠りて人に言譯するのみか本人も亦た世に出るほどいよ／＼昔しを怨み知らず／＼本心より親に不平を寄するが如き實に途方もなき次第となる是れ人情に免れがたき所ろに候、今日にてすら既に如此し故に他日彼の大變化ありたらん日に足下の愛孃が其身の文盲を怨むの餘り端なく足下の教育を思ひ出して之を不平とするとなどありては啻に足下の不本意なるのみならず親子一家の和睦に妙ならざる所ろあり特に愛孃當人の出世に關しては實に氣の毒なる御事と可相成と存じ、將來の成行を想像する每に實に痛歎いたす所ろに候。夫故へ如何の點より考へ候も今の女子教育を中止せらるゝ事は不道理なり不利益なり后の爲にも今の爲にも國の爲にも一己の爲にも御損莫大ならんと存じ候に付ては矢張り今日の如く否な今日よりも一層切に當今文明風の教育を施こさるゝと肝要と存じ候即はち今の一時の恐慌にビックリなされ万一お手を引かるゝ如きことありては其引き玉へる間丈けが御損となるべしと深く確信する所ろに候。

左ればとて今の風評頻々たるに際し少しも無頓着にてあられよと申すには之れなく何卒一層深く掛念して保護に注意し彌よ親切に取しまりて學問せしめらるゝ事可然と存じ候、依りて平生思ふ所ろ及び此際特に感ずる所ろを述べて諸君の注意を請はんとを望み候、即ち

第一　保證人の事　凡そ府下に父兄御自身住居せらるゝ方は宜ろし彼の保證人と言へるものを外に委托せらるゝときハ能々深く考へて極めて親切なる尤も用心深き且つ可成く血縁の近き人に其任を賴まるべし、各女學校の幹事に承はるに父兄方が保證人を撰まるゝと甚ハだ粗率なれば保證人が其の女生に注意するも亦甚ハだ冷淡にて常に考へもなく又取調べもせず輕々印を捺して屆け書を出さしむるとあり之が爲に幹事の深き保護も殆んど無効となるとあり而して幹事より之に掛合ふときは幹事が何か特更に八釜しきとを申すやうに思ひ反つて之を面倒がりて愈よ放擲せらるゝの弊ありと聞く、必竟は最初保證人を定るに其人を得ざりしに出で候とゆへ此の一義は父兄が初めに深く用心せらるべきとに候。

第二　學校を撰むと　輕々しく入れ輕々しく出すより損なるはなし啻に金錢上に損わるのみならず教育上に大損あり喩

へば植木を植へて引抜き又植へては直ちに引抜くが如し地面の好き所ろを撰ぶとも大切なれども既に一旦植へたるのちは容易に抜かざることも亦た更に大切なる心得に候故に餘り度々抜しことによりて之を尤も豐かなる地に移し得たるとき木は既に枯るゝ如きの不幸なからしむるやう御用心肝要と存じ候、夫既に屢ば移すとの不可なるが故に之を入るゝとも亦甚はだ鄭寧にし決して廣告や一二の評判などに由りて判斷せず能く〳〵吟味し熟考し思案し比較したるのち常人の向來に關する最も適當尤も良好なる學校に入るゝやう爲さるべく候。

此事に付ては弊社は從來喜んで御相談に預かり其人によりて各女學校に紹介し參らせたると少なからず故に訪問の父兄には喜んで面會し御相談可仕、爲に千慮の一助とならば幸甚に候。

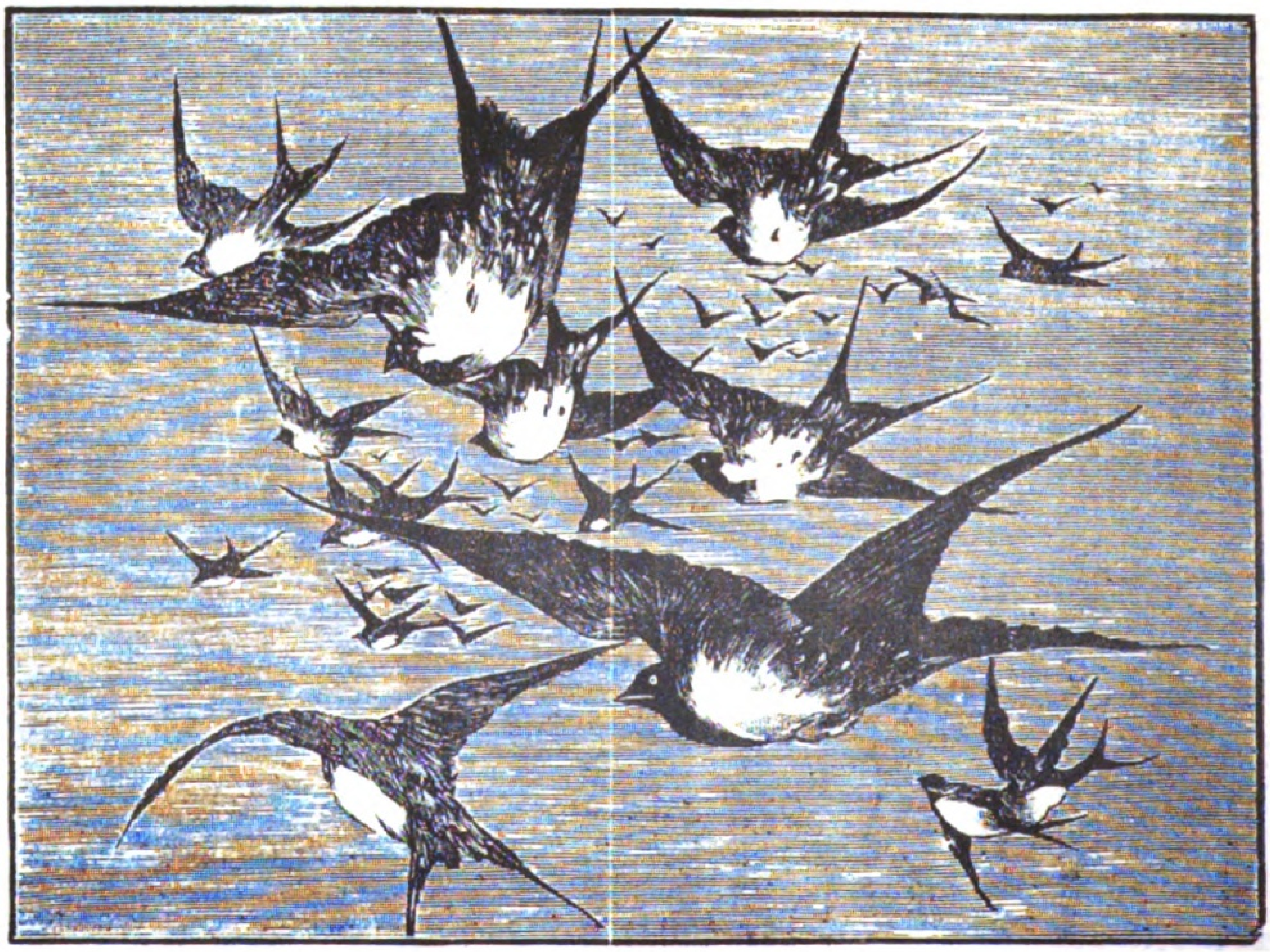
第三　塾舍の事　女學校の塾舍は所謂るカッテーヂ、システムにすべし、十人内外を入るゝ一小宅を分設し、之に一の女長老を添へて各別に自ら生計し學問するの工夫となすべしとは生が數年來に主張する所ろなれども金力の不十分なるより出來がたき女學校甚はだ多かるべし。扨て既に此の仕組なき以上は塾則の尤も嚴密なる、道德もしくは宗敎上の敎訓の確定有力なる、其校固有の氣風の純潔優雅なる所ろを撰みて入塾せしむるを可とす、愚考する所ろによれば當今の時世にては父兄の手元に置かるゝよりも塾舍に入れらるゝ方可然、况んや親族に預けて通學せしむるなどは實際に數多の弊あり此は經驗なき人の言ふとに候、然し此は取締の嚴なる感化の清き塾舍に付て言ふのみ然らざる所ろに愛孃を預くるは恰かも監獄に娘を送るが如し言ふ迄もなく恐ろしきとに候。」

以上當今の時勢に感じ只だ思ふまゝを隨記して御覽に入れ候必竟所思を有の儘に申さんとを主旨とし不穩當の語句も少なからじと存じ候へども只だ微志の在る所ろを察し今の時節の眞况を看破し彌よ確く信ぜられ益す切に慮ばかられ更らに前志を損せず一層愛孃の敎育に御盡力淺からずんば國家の大幸少なからずと存じ候、要するに此度の恐慌は女子敎育者に深き警戒と自省とを與ふるに止まり諸君に一點の狐疑心を生ぜしめざれとは誠實に熱心に小生の祈禱する所ろに候敬白。

六月十七日

女學雜誌社　巖本善治

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十七號
明治二十二年六月廿二日發兌

社説

○英雄豪傑

此に左の三個の議論ありとせよ、

云く、英雄豪傑に寧日なし常に戰ひを止めず。

云く、大丈夫たらんとするは丈夫の心なり、大丈夫たらしめんとするは佳人の情なり。

云く、今の教育ある女學生は、尤も安寧なる職業の人に嫁するを宜とす。

右三個の議論はそれ／＼に正理ある乎、但だ其の相ひ矛盾するを如何んせん。

抑そも英雄豪傑とは何如なる人物を稱するの謂か、吾人東洋の傳記歴史を繙とく毎に、常に此の一點に疑がひなくんばあらず、蓋し支那日本の古今に著名ありし人物中、其の豪宕鬱勃の氣象に淋漓たるものあり、其慷慨悲憤にして肉を裂き血を啜れるものあり、其の剛膽猛烈にして巨山を動かし大江を決するものあり、若くは高義正大にして徳風堂々感化の及ぶ所ろ魔神をだに辟易せしめたるものあり、大凡そ如此き凛烈高尚の人物此の東洋の古今に尠なかりしにはあらざる也、然るに彼の史家傳者の評するところを見れば、彼等は如此き偉丈夫を稱して聖人とし、君子とし、忠臣とし、亡國の義士となせり、而して其の所云る英雄豪傑なるものに至つては別に其人ありとするが如し。故に試みに古今の歴史傳記中より彼の聖人、君子、忠臣、亡國の義士と稱呼せられたるの偉人を除き去れよ、而して其の殘餘する所ろに就きて所云る英雄豪傑なるものを撰出せよ。云く慨然として志を起し、夙に功名を以て望みとなし、情を矯め理を曲げて跳躍す、畢生の願望は只だ權勢を握るに在り、私情を逞するに在り、天下を掌に動かして万民を自由に役使するに在り、此を以て或る時は君を弑するとあり、又或る時は親を死すとあり、妻を棄て娘を賣り兄を質にする如きは蓋し其の容易なるものなり、若し夫れ之が行情を縱じ誘れば、殺すにあり、欺むくにあり、僞わるにあり、盜むにあり、奪ふにあり、虱を捻つて談論するにあり、家内を掃除せずして横臥するにあり、放言高論して人を罵るにあり、權謀術數を逞しうして詭辯を奮ふにあり、凡そ百の亂暴不善を行つて之を洒々落々なりと稱し、爲めに買ひ得たる所ろは人心を籠絡し、國家を私し、以て某と云

へる名を只だ竹帛に垂るゝとなり、嗚呼如此き實に是れ眞誠の英雄豪傑たるもの乎。果して然らば吾人は殆んど東洋の英雄豪傑に服する能はず、何んぞスコットの戲作する所ろ、パーンスの歌ふ所ろ、カーライルの論ずる所ろに異なるの甚しき、又何んぞワシントンの兵權を握りて而して後ち王位を辭し、クロムエルの鋤を擲うちて而して後ち半日祈禱し、ルーテルの止むあくして獨立し而して後ち列國王侯の前に宣言するに異あるの甚しきや。抑そも英雄豪傑なるものは實に何如んの人物なる乎。

思ふに亦是れ一種の人間たるに相違あし、其の耳目鼻口の別段に異るにあらず、昔し曹操よく之を辨じたるが如し、然らば其智德を如何にと云ふに、斷えて亦た特別の異質を存するにもあらず、但だ其の普通の人に尤も多く相違する所ろは、蓋し人性茲に至りて大ひに發達し、其の確固たる精神、其の俊爽なる智能、其の純高なる道德の格外に生長し存するに由らずんばあらず、而して特に其の道德の尤も多く發達せざる所ろに茲に秀抜なる人間あるを得ざるが故に、大凡そ人の偉なるもの、巨なるもの、大なるものを以て若し英雄豪傑なりとせば、英雄豪傑は正に必らずや道念潔白德行絶倫の人たらずんばあらず。此に於てか彼が義を慕ふと必らずや深かるべし、道を履むと必らずや確かなるべし、同胞を思ふと必らずや切なるべし、其の道義に據り人類に憂ふるや既でに如此く而も其の自信自任するの厚大なる決して尋常ならざるが故に、彼れ若し世の弊惡を見れば卒然として起り立つべし、國家の大事を見れば蹶然として躍り出づべし、向ふ所ろ殆んど倒山沒海の故障を掛念するに足らず、直情徑行、單志鋭突して事成らずんば止まず、必竟只だ衷心の刺衝する所ろ之を禁ずるを得ず、四民塗炭の苦 之を坐視するに堪へず、百年一到の機之を失ふに忍びず、斷乎として身を犠牲にし、潔然として自利を棄て、以て終身の苦樂を國家公共の大役に獻ぐるにあるのみ、誰か眞豪傑の本志此にあるとを疑ふか、蓋し英雄にして初めて英雄を知るべき也。

然るに人世は平々坦々として無爲に化すべきにあらず、喩へば江河の流れて洋海に入るが如し、時に怪巖巨石の屹立して中流を割り、以て水波を潑剌奔躍せしむるとあり、亦時に千丈の落底存し、水勢突下、瀑瀑万丈の偉觀を呈するとあり、果して是無用の變化なるが如くにして而して實は是れ水流の海に入を尤も速迅にするの効あるに似たり、人世の天國に進み

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

行くとき亦大ひに之に同じきものあり、必らず時に之を防ぎ時に之を激し時に之を束しにし時に之を決するものなくんばある可らず。見よ人は皆な成人して立派の人物となり得るものにあらずや、而して彼等は皆な如此く立派にならんことを願望するなり、然れども啻に其の願望あると其の成就するの資格あるとに由りて乍ち立派なるものに進化するにあらず、必らずや十數年の苦學、幾多の涙、數百回の說敎、信切なる父母敎師の鞭あるにあらずんば達する能わじ。如此くに人世も亦た決して容易に進むものにあらず、弊害の欝積するとき之を破裂するの人なかる可らず、滔々として民心の惑溺するとき之を覺醒するの人なかる可らず、國家危うきに懸り万民方向に迷ふとき之を宣傳して大盤石の安きを與ふるの人なかる可らず、蓋し如此き人ありて世は初めて安全なるを得、而も惡しきに去りに宜しきに進むことを得るなり。此時に當りては如此き人物の世に現はるゝや屹乎たり卓乎たり、億兆に表出して四海に照らす、恰かも怒濤狂瀾の間だに燈台の平立して燦爛たる光明を發するが如し、望み見れば四方暗らくして只だ之れのみ明かし、一條の明光は只だ之より發して稍やく方向を示す、如此く全世界の此の宣言者、改革者、大敎師を見ると他に人なきが如くし、惣ての運動は正に之よりして發し來るが如くするなり。小說戲作に主人公なるものあり、一篇の波瀾變化悉とく此の中心に發す、此に於てか作者此の主人公を呼んでヒーローと云ふ、蓋し人世に英雄豪傑の冠たるは恰かもヒーローの小說界に主人公たるが如し。

英雄豪傑の資格たる夫れ如此し、即はち當世の必要に應じて國家の運動に卒先し、其精神によりて時弊を衝き破り、其の智能によりて一世を提携し、其の道德によりて萬民の涙笑喜樂を調ふるものなり、之を以て戰ふ所ろの英雄豪傑あり、歌ふ所ろの英雄豪傑あり、議論する所ろの英雄豪傑あり、傳道する所ろの英雄豪傑あり、革命する所ろの英雄豪傑あり、預言する所ろの英雄豪傑あり、英雄豪傑の躰はさま〴〵なりと云へども、其の粹や一とつ、即はち大ひなる智德意を以て時流ゐ逆ふもの是れ也。故に彼のカーライルが云へりし如く、或はマホメットの預言となり、ダンテ、シエクスピアの詩となり、ルーテル、ノックスの改革となり、ジヨンソン、ロウソウ、バーンスの文字となり、クロムエル、ナポレヲンの王となりて現はるゝことあらん、其現はるゝや時勢に隨つて變ず、然れども皆な是れ同一元のヒーローたる也。左ればヒーローとな

り英雄豪傑となるものは古今常に同一樣の機運に會り、即はち彼等は常に世流に反對し、其の順風に乘ること甚はだ稀れにして、逆風に向ふこと尤も多し、否な多きのみにあらず若し逆風に逆ふにあらずんば即はち英雄豪傑なるものを出現するに至らざる也。元と彼等は世に憂ひて立ちたり、左らば世人の爲す所ろに反對せざる可らず、既でに反對せば世と戰はざる可らず、既でに戰はば勢ほひ世を混亂せしめ騷動せしめ「吾が世に來れるは治安を出さんことにあらず劍を出さん爲なり」と言ふべきこともあるべし、何んとなれば彼等元來自らの爲に不滿足なるにあらず但だ世の爲に不滿足なりとして出現し來りたるが故に、其の世の爲めに運動する所ろ必らずや波を躍らせ水勢を激するの觀あるを至當と爲す、彼等は靜かに眠ることを爲さず、温かに着ることを爲さず、安んじて食ふことを爲さず、獨樂して文章を慰さむものにあらず、舞踏して劍を弄するものにあらず、常に狂するが如く奔走拮据して寧日なく、狐には穴あり鳥には巢あれども自ら捿ふべき所ろなく、人躍らざるに笛吹き人悲しまざるに胸打ち、間斷なく號泣疾呼して獨り天地に叫ぶものなり、エマソン曰く英雄豪傑の粹は人類の聲に反對するにあり、時としては大人善者の聲にすら反對するにあり、而して其の一個特得の隱密なる衝動に刺激せられ、平和の荒原に悠々せずして、雷電霹靂の間を通り、安然喜樂を卑しみて常に戰ふもの也、其の靈魂の常に戰裝を爲す所ろ即はち余輩が英雄豪傑の稱を附する所ろ也と。

固より彼等は特更らに世を騷がすものにあらず、只だ騷がすことによりて、大ひなる治安を來さんことを欲するにある也。然りと云へども其の窮極の理想に達するの路程として彼等は必らずや戰はざる可らず、盖し戰なくして可なるところに彼等は出現し來らず、例へば孔明の蘆を出で楠氏の山を去るが如く初めより先づ戰意を決して而して後ち出で來るもの也。夫れ既に戰ふの覺悟あり、而して戰ひには爭鬪を含み、爭鬪には傷害危險を含むが故に、苟くも一旦英雄豪傑として出で來りたるものは、必らずや寧日あるなく、必らずや安穩あるなく、必らずや十全の命あることなし、之あらんよりも寧ろ之れなきを常とす、何んとなれば、彼等は戰ふものあれば也、犧牲たるものなれば也、身を獻ぐるものなれば也、自ら劍を拔くものなれば也、滔々たる時流に反對し敢て怒濤激浪に逆ひ進行するものあれば也。

果して然らば苟くも英雄豪傑を慕わずんば止む、若し之を慕

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ふとの樂しきを知り、更らに之と運命を一つにするの榮譽たるを知るものあらば、其人や亦た必らず英雄豪傑の危險傷害を分ち取らざる可らず。茲に人あり、貴婦人に向つて卿は英雄豪傑を愛するか、抑そも平々凡々の人物を愛するかと問ふものあらば、如何なる貴婦人と云へども必らず怫然として答へざるべし、何んとなれば女性最深の情に於て嘗て英雄豪傑を慕はざるものなく、彼の平々凡々の俗物を慕ふもの決してこれあらざるが故なり。蓋し剛魁烈雄を慕ふは女性天禀の性なり、之れありて自ら彌よ其の女德を優にし亦之ありて他に彌よ男性を偉丈夫たらしむ、彼の獨逸男兒の面に傷あるを榮譽とし、英國少年の悉とく海軍水夫たらんとするは豈に佳人が武勇を愛するの刺激に由るにあらずや、而して此等の佳人は只だ浮浪輕卒に之を愛視するにあらず、其天性の發する所ろ實に然らざるを得ざる也。抑そも天の男女に賦する所ろ巧妙なりと云ふべし、男をして女の優あるを愛せしめ之を以て彌よ男を武にし女を優貞にす、而して亦た女をして男の雄んなるとを慕はしめ之を以て彌よ女を溫雅にして男を勇壯にす、大丈夫は切に佳人の優しきを愛するものなり茲に於てか窈窕たる佳人あり、窈窕たる佳人は武士の勇ましきを慕ふなり茲に於てか剛膽なる大丈夫あり、苟くも上帝の配劑を覺悟せんと欲するものは須らく先づ此の天工を知るべし。此時に當りて揚々論ずるものありて曰く、政治家は殺ろさるゝとあるゆへに危ふし、醫者はコレラ病に近づく故に剣呑なり、陸海軍人は生命を棄つるの義務あるゆへに恐ろし、故に世上の女性之に嫁するを止めよと、如此き卑劣論の國家を大害するは言ふ迄もなし、更らに此は男女天來の性質を悉知せざる極めて馬鹿げたる老婆論なり。

英雄豪傑を造るものは女性なり、英雄豪傑を勵ますものも亦女性なり、然りと云へども古來幾多の英雄豪傑が亦た女性によりて其の英雄豪傑たるとを失ひしは、嗚呼此れ女性天賦の美質を開發せしめざりしの失策に歸因す、若し婦女子にして能く學び、高く思ひ、其の特得の美なる愛念に圓滿し、以て世上に鬱積胚胎したる百種の大弊害に泣歎したるとき、此等の弊害に逆らつて戰鬪苦勉するの英雄豪傑を贊賞するや、其聲眞に爽快より發す、即ち勳爵士をして馬上に打死せしめ、直進短劍を揮つて花死せしむるの號令とはなる也、シエクスピアの院本に云く、

彼女は余が經過したる危難の爲に愛し、余が彼女は此等の

危難を憫れみたるによりて愛せり。

イルビンク亦た此の情致を悉して云く、

世間に感動すべきと多し、然れど彼の平常軟和優柔にして凡そ幸福ある道路を踏むときに當りては極めて些細なるとにのみ掛念する所ろの婦人も、一朝事あるに當りては卒然として一變し、其の不幸の下に伏したる良人の慰め手支へ手となり斷えて屈せざるの勇氣を以て最苦の不幸に反對するを見ば、天下蓋し之よりも切に感動すべきものなけん、譬ふるに彼の槲樹と草蔓の如し、草蔓延々として偉大なる槲樹を纏ひ、匍匐依登して日光に當り、以て綠々の葉を盛んにす、僅かに槲樹によりて若く高きを得る寧之に重きを加て只其煩はしきものゝ如し、然るに一朝雷霆ありて幹木を破ぶるあらば、草蔓即はちはひ至りて之を纏々包括し、數多の細蔓重なり覆ふて厚く之を保被する也、女性の世に於ける恰かも之に似たり、良人の幸わひなるに當りては只其懸り人只其裝飾たるに過ぎざるが如しと云へども、一旦不慮の災ひありて良人之に擊倒せらるれば、彼女は輙はち其碎けたる穴を包み、其衰ろへたる頭らを支へ、其破れたる心を縛ばり、以て其の隱れ場所、慰さめ場所となる。

女性の優情、天に得る所ろ實に如此し、之れ即はち以て國家を富强にし、天下に英雄豪傑を多からしむるの秘密たるなり、古來幾多の田舍ハムプデンか之によりて世上に出現したる、又幾多の新英雄出產し老英雄復活したる、思ふに古今萬國の英雄豪傑は概むね是れ賢母によりて生れ、佳人によりて養われ、良妻によりて成就したるものにあらざるはなし。故に云く、今の高等女學生は須らく此の英雄豪傑を愛すべし、別言するに尤も危險多く、尤も不幸多く、尤も寧日少なく、尤も短命なる職業に在る偉丈夫を愛せよ。

論説

○女子敎育論時弊

理學博士　箕作佳吉

私は元來動物學を攻究致すのを本務と致し居りますが嘗て故ありて聊女子敎育にも關係したることがありました其に因りて女子敎育上一二の點に就きて暫時諸君の御耳を煩はします。

第一に女子の健康と敎育との關係に就き少し申上げませう女子十三四歲より數年の間は其身躰の發育に最大切なる年齡でありまず此際に充分の營養を身躰に與へざるときは生涯の禍を釀し生涯の不幸を起すとが出來ます即病身となることあり生殖器の病氣を起すとあり子を產むと能はざる樣にあり子を

產むも柔弱の子を產み又己よりも充分の榮養を與ふると能はざるとを生じます夫故に四五年間は女子の一生にとりて實に言ふべからざる大切の時であります女子として國家に對し夫に對し子に對し其義務を盡し得ると否とは大に此數年間に因ると言ふて宜しかるべし然るに不幸にして此數年は丁度女子の高等教育を受くる年齡と落合ひ居るを以て大なる弊害を生ずるとが多くあります上に陳べたる如き身躰上の不幸は之を恐れざるにはあらざれども未來のとなれば眼前に迫る學科上の必要に壓され身躰に與ふべき營養を取りて之を腦力に費すとが起り易くあります是れは歐米諸國に於ても通弊なるが如し例へばデンマルク國にてはドクトル、ヘルテル(Dr. Hertel)著(Over-Pressure in Schools of Denmark)(三月の教育會雜誌中生駒恭人氏の論説に此の書より引用したる表を見るべし)の調査に由るに六歲の女子には健康の者凡そ百分の七十五病弱のもの百分の十二あるに十六歲に達し高等學校に在るに至りたるときは病者百分の六十一健康のもの百分の三十九となるを以て不適當に修業するとの健康に害あるを知べし米國にても此弊害最も甚しく或る人は米國の婦人を評して Intellectually a success, physically a failure と云ふに至れり目下同國にては此の點に就き辯論する所の醫師少なしとせず又た此の點に就き注意すべきとあり凡そ生物は其生活の有樣を變じたるとき最も容易に此の變動に感ずる者は生殖器であります野生の動物を捕て之れを畜ふに蕃殖せざるもの多きは即ち其の一例です又皆樣御存でありませうが布哇及び其の他の大洋島には人口が不絶減少して行きます而して其減少の度は尋常の減り方でありません凡そ百年程前にクックが布哇島に始めて航行した時には土人が凡そ三十万もあつたろうと申すとです夫より漸々減少して現今では五万にも足らぬと云ふ事です是の減少の原因は種々ありませう傳染病不品行强飮等も其中にありませうがダルウヰン及び其他の人が取調べたるに此れ等の島には歐人と交際する樣になりて生活の有樣に激變がありたる爲め婦人の子を生む力が減少したるも一の大なる原因だと申します即ち此等の島民が裸躰野蠻の有樣より稍歐洲の文明開化に似たる有樣になりたるは恰も野獸を捕へて畜養したると同樣のとにて其變動が身躰に及ぼし子を生む力が減少したのでありませう扨我國は古來より開化して居る國でありまして固より此等の島民と同日の論ではありません是迄西洋風に變化したと云ふても我々に取りては左程の變化ではな

い且つ一家内中の生活の有様には未だ左程の影響もありません併しながら我國の女子教育に取りては此事は大切なる關係がありますよく考へて御覽なさいまし近頃までは通常の婦人は僅々の讀書をして一通の消息文が書け針仕事が出來れば先づ普通教育は終りたるものです其上に箏がひける歌がよめる花がいけられる茶の道を心得て居ると申せば餘程の高等教育を受けたる婦人です漢書がさら〳〵よめる書が能くかける抔と申せば最早普通を外れた女史です故に學文上は兎も角も躰育上から見れば其身躰が充分に發育する折がありたるに相違ない又充分に其子が丈夫だつたに相違ない其に反して現今の世の中では中々爲ねばならぬことが多い幼なき時より幼稚園小學校其より進みて稍高き女學校に入り和漢文は勿論英語もせねばならん數學も算盤の加減位では濟まない算術は固よりのと代數幾何も一通り又物理化學動植物も怠りてはならん音樂も和洋畫學も彼我共に裁縫割烹も東洋西洋両ながらと四方八方より攻め立てられ十八九歳になるまでは實に學業に忙はしく他を顧るの暇間なしと申して宜しき位です其他の事柄にても今日の女子の責任は往日より重く心身に對しての需用が多くなりて居ります往時と今日を比すれば實に雲泥の差てあります實に今の社會上の改革は男子よりも女子に取りて大なる改革と思はれます扨此の如くの變化は若き婦人の身躰上に幾分か影響を及ぼしはせまいか大に心配せざるを得ざる場合と考へます私の考へにては上に述べたる二の事實即ち女子の高等教育を受くる年齢は其身躰發達に最も大切なる時期であると云ふことと激烈なる社會上の改革は女子の子を生む力を減少することありと云ふ此二つの事實は女子教育の任に當るものは片時も忘れてはならぬことと思ひます若忘るれば幾人の幸不幸に關することを生ずるかも知れません遂には我國の存亡に關することを惹き起しますかも知れません此點につき只女子のみを責ても其功は少いことと思ひます生徒は年若くして修めて居る學科を充分に勉強したく思ふのも無理はありません女子の教育を負擔して居るもの即學校の職員教員生徒の兩親が此點に注意せねばならぬことと思ひます固より今の世となりては往日の如く學文を打ち棄置く和解にも行きません併し學文にのみ偏して身躰を顧みないのも甚しき誤りであります男子の教育でも一時は殆んど躰育を顧みない時期もありましたが此頃は大に此點を改良した樣に思はれます女子教育には未だ女子身躰の固有を顧みて充分に其發達に時と滋養を與る仕組

八

になりて居らぬかと思ます固より女子の教育に從事して居らるゝ方にて此等ゑ注意して居らるゝ方もありませう併し此事は實に我國に取りては容易ならざることでありますから何應繰り返して云ふとも余計ではあきかと思ひます格別女生徒の兩親特に母親が此事を了解して其積りになりて子を育てゝ下さらなければ學校の方で何程心配するとも其効は少きかと思ひます私の望み已まざる所日本婦人こそ Morally, intellectually and physically に sincere なれと云ふやうに致し度きことです。

○高等女學校教頭能勢榮氏の教育ある女子にして夫婦併立の生活を遂けんとするには如何なる男子に嫁すべきかと題する論説を讀て更らに再考を望む。

神田　宮下きよ子

近來諸新聞紙上暗に高等女學校を指せるものなるへし種々聞くに忍びさる醜聞を傳ふれども妾は容易に之を信せす思ふに齊東野人の誣言にして殊に媒灼學校と醜名せるか如きは之れを傷けんと欲して毫も中らさるものなるへき歟妾は敢て氏の爲めに辯護の労を取るものにあらす然れとも道理の爲めには妾か饒舌は元より犠牲に供すへき覺悟なれは聊か左に辨明する所あるへし。

抑も高等女學校か其女生徒を養成するの目的は果して那邊にあるかを考へよ高等女學校は其卒業生をして如何なる方面に向て供給せんとするものなるか高等女學校は其卒業生をして女教師たらしむるものなるか將た牧師又は專門家たらしむるものなるか否決して然らさるなり抑も高等女學校か其目的とする處のものは他ならす之を約言すれは高等々學校は其女生徒に高等普通學を授けて以て善良なる妻女たるへきものを養成するにあり夫れ然り果して然らは高等女學校か其女生徒又は卒業生を媒灼して之れか伉儷を得せしむるに於て何の不可か之れあらん豈に夫れ獨り不可なきのみならす實に斯くありてこそ能く其職務に親切なるものと云ふへし論者請ふ試みに双眸を開て他の一般男子の學校を見よ今一二の例を擧けて之を示さんに師範學校は其卒業生を介して中小學の教師たらしむるにあらすや又職工學校は其卒業生を介して諸工場の技手たらしむるにあらすや其他醫科大學は其卒業生を介して地方公私立病院の醫員たらしめ法科大學は其卒業生を介して司法行政外交等の官吏たらしむるにあらすや論者是等も尚は不正なり醜態なりとなすや男女其人を異にするも同く之れ媒灼なり凡そ是等の學校又は教師にして其養成せる所の生徒を介して各其分を得せしむるは之れ實に其職に親切なるのみならす寧ろ當然の務めなりと云ふも豈に敢て不可あらんや尚は一歩を進めて仔細に之を論すれは男女交際の道狭隘にして男女各其好逑を擇むと能はさる今日の社會に於ては佳人ありと雖も之れを知るの才子なく才子ありと雖とも之を慕ふの佳人なく婚姻は徒らに親族朋友等少數知人の間に於てのみ求めさるを得さる有様なるにあらすや凡そ斯の如きは生理上之を忌むのみならす斯る狭隘なる範圍に於て偕老同穴の好配偶を求めんとするは豈難事ならすや論者請ふ再思せよ蓋し思ひ央ばに過ぎん。

以上論する處は諸新聞紙か近來頻りに報する所の記事を假りに精確なる事實と見做して以て立論せるものなれとも若し或は臆測の事實なりしならんには妾は却て是等の事實あらんとを希望するものなり然れとも妾は敢て媒灼の榮を得たるか爲めに之れを辨護するものにあらす只一片の赤心其信する處を吐露するに過きさるなり故に妾か否認する處は僅々毫も之を假す處あらさるなり。

國之基第三卷に教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂けんとするには如何なる男子に嫁すへきやと題せる能勢榮氏の論説あり熟ら之を通覽するに歸する處法律家(特に代言人)政治家商法家農業工業醫者軍人新聞記者等は何れも可望の夫にあらす僅かに理學士文學士のみ安全にして夫婦併立の生活を爲すに足れりと云ふにあり蓋し安全及ひ併立とは如何なる意なるや殆んと適當の解釋を得るに苦めとも假りに妾の意解する所を以てすれは安全とは俗に所謂氣樂と云ふの意にして併立とは夫婦稍や同一の業務を操るの謂ひなるへし即ち俗に所謂共稼きとでも云ふの意なるべきか如何となれは該文末項に曰く全体婦人は文學圖畫音樂等優美なる智識の多く發達するものにして武事政治法律工業商法等の智識に疎遠きものなれは夫と共に職業の苦樂を味ひ共に與に働きて立身出世を計るとを得るは政治武事工商等の人にあらすして文學か若くは理學の人にありと云々とあるを以て之を知るへし若し果して斯の如き狭小なる意思を以て該論を草せしものとせは妾は敢て之れを非認せす默して度外に置かんのみ若し强ひて一言を容るれは只更らに之を附補して云はんとす曰く婦人は啻に圖畫音樂等優美なる智識の多く發達するのみならす又大いに技術の技能を有するものなり故に夫と共に職業の苦樂を味ひ共に與に働きて立身出世を計らんとするには宜しく彫刻師又は刺繍師裁縫師等に嫁するを可とすと然れとも妾は元來男女分業を可とするものにして各固有の長技を擇むとを希望する者なり例へは男子にして若し政治法律武事農工商業に長せは宜しく之を爲すへし又女子にして若し文學圖畫音樂裁縫等に長せは宜しく之を取るへし豈敢て夫妻同一の業務を擇むの必要あらんや若し强ひて同一長所の職業を擇

んさせハ氏か所謂理學文學等の如き實に僅少の種類に過きさるを以て統計上男子より數多き女子をして悉く理學士文學士の妻たらしむるを得るか假りに悉く是此の妻たらしむるを得るさするも果して能く併立するとを得るか夫妻ハ凡て異性質のものなるを要するハ生理上是認する所ならすや果して然らハ皆同一職業を以て可なりさすへけんや依此觀是氏か所謂併立云々ハ到底實行を期し難き御議論たるに過きさるなきを得んや尚又氏か所謂安全即ち愉樂と云ふに至りてハ殆んと解むへからさるものにして（但し氏の極端説に依るときハ）氏か所謂理學士文學士さても未た必らす安全なりと云ふへからさるなり凡そ利害得喪の相伴ふハ事物の常態にして其利のみを取て其害を捨つれハ天下の事一さして利ならさるはなく又其害のみを指摘して其利を顧みされハ社會の事物一として害ならさるへなし然るに氏ハ職業を撰むに概ね其害のみを擧けて其利を取らす其利を擧くるものハ僅かに理學士文學士のみに過きさるハ豈極端偏僻の御議論と云ハさるを得んや若し果して氏の所説の如くならハ社會の事業一さして安全なるものあらさるを如何せんや是れに依りて之れを觀れハ蓋し氏か所謂安全なる夫婦併立の生活を遂けんさの御議論ハ甚た難きを求むるものにして宜しく斷念せさるを得さるなり。

法律ハ社會の安寧秩序を維持するものなり之を執る所の司法官ハ勿論特に代言人（氏の尤も御嫌ひの）の如きハ人の爲めに能く寃を雪き人の爲めに能く權利を伸張する所の有爲活潑なる職業なり然るに氏ハ徒らに代言人中或る部類か人を欺き利を計るの醜行あるを以て直ちに一般代言人も皆斯くの如くなるへしと肯定せるか如きハ是れ豈其當を得たるものならんや世の所謂三百代言人又ハ昔日の代言人ハ卒ざ知らす今日以後の代言人も尚且つ然りさなすか如きハ蓋し誤るも甚たしと云ふへし氏ハ特に米國の例を擧けて喋々すれとも蓋し妾の聞く所を以てすれハ米國にてハ代言人ハ特に社會の上流に立ち公衆の信用と尊敬とを受くるものにして決して氏か所説の如きものにあらすと今試みに米國に於ける代言人か社會上如何なる地位にあるやを最近の實例に徴すれハ左の如し。

大統領クリーブランド氏
　本年四月の更改撰相成りたる人なり。
本邦駐在全權公使スイフト氏
　昨今渡來せし人なり。
其他同國現内閣大臣中にも數人之れありやに聞けとも取敢さ爰に載せす。
　同國下院議員
專門者二百六十四名　工業者二十四名
商業者二十四名　農業者二十一名
　合三百三十三名
右專門者二百六十四名を類別すれハ
　代言人二百二十名　醫師七名
　新聞記者十二名　僧侶五名
　專務政治家十八名　勞働人總代二名

前掲の實例によりて之を見るも米國に於ける代言人は其地位社會の上流に在るものにして豈氏か所説の如きものならんや然れとも氏は其眼中殆んと社會なるもの之れなきか如し何となれは氏の所説に曰く政治家は世俗の弊習によりて榮譽と思ふものあれとも是れ俗眼を以て見るものにして愚も亦甚たしと云ふへし抑も職業の榮與は人にありて職業は人の榮榮を致すものにあらす政治家の榮譽は虚名のみ而して此虚名を買ふ爲めに非常の實益を害するものなり云々嗚呼之れ如何なる妄言ぞ氏は人類を以て單獨に生活し得るものとなすか苟も人類にして交際的動物ならんには豈社會其者を以て人間萬端の標準となさゝるを得んや故にも政治家にして社會の信用と尊敬とを受くへきものとせは是亦榮與ならずや蓋し政治家を以て榮譽の地位なりとなすは之れ國家の安危を負擔するの重任あるか故にして彼の自己の利之れ事とするか如き一個の職業と其趣を異にするか故なりとす。

之を要するに職業の榮譽は職業其れ自身に附隨するものにして決して人を待つものにあらさるなり言を換へて之を云へは人は只其職業に依りて得る所の榮譽を受くるに過きすと云ふにあり尚ほ之を再言すれは榮與は職業に附隨するものにして人は其職業に依りて榮與を受くるものなりと云ふにあり然れとも爰に注意すへきは妾か以上に所謂榮與なる文字は單に職業上の榮譽即ち社會上の地位を意味するに過きすして彼の品行上の榮與は之れに含むものにあらすと知るへし故に榮與なる職務と雖も若し其人にして醜行を爲さは爲めに其職業上の榮譽をも併せ害するとあるは掩ふへからさるの通弊にして現に政治家法律家の如き榮與なる職業者にして其人に醜行あるか爲めに政治家は榮與の職業にあらす法律家は榮與の職業にあらすとなせる論者あり即ち能勢氏の如き其一人なりと云ふへし所謂坊を惡んて袈裟まて惡むと云ふの類は蓋し是等の謂ひ歟彼の商業工業農業醫師軍人新聞記者等に就きて論する處も概ね皆な極端偏僻の御議論なれは以上論する所を以て推て之を辨駁すれは足れり只た終りに臨んて更に氏の再考を促さんとするものは敎育ある女子にして其夫を撰んとするには單に理學士文學士に止まらす榮譽なる職業にして品行端正なるものを撰はさる可らさるとこれなり今例を以て之を述れは政治家は榮與なる職業なり然れとも其人にして醜行あらは宜しく其人を避くへし代言人は榮與の職業なり然れとも其人にして巧みに人を欺き利を計るか如きとこれあらは宜しく之れを忌むへし然りと雖とも或る部類の政治家にして醜行あり或る部類の代言人にして人を欺き利を計りたるとこれありたるか爲めに一般政治家及ひ代言人は決して之を撰むへからすと云ふか如きは抑も極端偏僻の御議論にして氏の爲めに取らさる所なり呵々。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

批評

○篁村先生の「堀出し物」　藤の屋主人

自序書なしさら〳〵として白布を水に流せしが如し。作者曰――是れ卷中第一の出來なり、「堀出し物」の價値何れに存すなぞト巾さば此「作者曰」を指摘するより外なし。篁村先生一流の輕妙、アヂソンと其碩を混和せし古今の妙絶。

我れ是を讀んで愈々先生の筆才凡ならざるを知る。

然るに本文を讀んで啞然之を久ふす。先生の筆は唯「作者曰」に止まりしか、さても平生の縱横無盡なるに似ざる事の甚しき是れ篁村にあらずと思はしむるに到る。我れ聞く死せる孔明生ける仲達を走らすト、先生又篁村の名を以て俗物を驚かさんとせらるゝか、ハテ不審しきかな〳〵。

。先生こそ其碩の神髓を得たるなれば輕妙にして且つ精細なるは他の及ばざる處、先生が文壇に推尊せらるゝも此故なり。もしセンチメンタルを求むれば二葉亭あり、ローマンチックを欲すれば南翠外史あり、景叙に美妙齋、描心に春の屋。是等は先生に望まずとも他に得意者あれば我等が先生に欲する點にあらず。先生が得意は輕快諧謔なる文字を弄するにありて我等が服する處又爰にあり。蓋し先生の文は純粹なる其碩にもあらず、其碩より出でゝ更に輕快なればこそ我國文學上に一種の光譽を有するに今其得意を外にして強て時俗に倣はんとするは狩野を學ぶ人の南畵を作るが如く、我等先生の爲に是を惜む。或人曰く篁村先生の小説には必ず若檀那俳諧師半可通隱居及幇間ありト、是等の人物は皆先生の筆の變化する處にして先生の作の妙は實に其人物にあり。「堀出し物」を見るに若檀那なく俳諧師なく半可通なく幇間なし、唯隱居あれども先生が常に好んで描出さるゝ所謂隱居とは異なりて樸訥たる人物にして未だ先生が筆をして宛轉せしむる能はず。是れ「堀出し物」の傑作ならざる所以にして若し近日の面目玉及苦樂と比較すれば其何れか優れるを容易に悟らるべし。嘗て先生が某人に語られしを聞くに先生の小説は胸中欝積する滑稽を洩せしものなりト。是れ或は然らん、先生が筆は唯滑稽に止つて可なり、豈殊更に時俗に阿りて眞摯を氣取るを要せんや。

「堀出し物」を評する人曰く趣向陳腐にして見るに足らずト。趣向元より陳腐なりト雖ども是を以て退くるは先生を知らざるなり。先生の小説は文章に有て趣向にあらず。もし趣向をも

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

て曰へば先生の傑作たる商人氣質も蓮葉娘も川添柳も皆評するに足らず、唯文章の輕妙なるを愛するのみ、されば「堀出し物」の趣向陳腐に屬するも是れ責むるに足らずして文章を評するこそ至當なりと云ふべし。

然らば其文章は如何と云ふに大に先生平日の妙を缺くに似たり。請ふ是を例せん、開卷十一頁に

「夕日は山のあなたに沒て尙ほ西の空に彩りたる雲を殘し飛鳥は林の方に向ひて輪の形に旋りて黑き群をなす丘の松は靑く蓋を張りし如く畑の菜の花は黃金を敷きしに異ならず細くして淸き流は山を出て遠からず」

又十二頁に「脚半と見へしハ泥にして洗へば淸き足となれり左れどそれを拭ひて疊附の駒下駄を穿かへるといふ譯にてはなく其まゝまた跣足なり夫より泥だらけの顏を洗ひ次に水一口掬び飮みて始めて欣然と立て四方を見たり若し是を盥の水にてせば如何あらん(中畧)水の淸き事よ」

右は果して先生平日の文とことならざるか、縱令味あはずとも一讀して美妙齋の得意の形容を學びて最拙に陷りしを知る。

十三頁に「山は夕陽に赤かりしもやゝ薄くなりて白く黃を帶びたる空となり森は黑みて塒を爭ふ鳥の聲噪しく見渡す限りの村々は遠く近く竈の烟立のぼれり」

是れ又美妙齋を學びしものにして先生一種の妙味を缺く。

次に續きて「若者は此夕榮の景色をながめて詩を案ずるに歌を詠まんとにや將た俳句を吟じ出さんとするかしばらくハ眼を轉ぜず足も移さず立しまゝにて其身は立ちしまゝなる事をも忘れたる樣子なりしが頓て巖を下りて柔かき草の上に坐りたり」

是れ最も時俗に阿りたるものにして先生の妙味を全く失ひたり。我れ此篇を讀み、爰に到り呆然、唯流俗の先生を誤りたるを嘆ず。

椿の根より箱を堀出すも堀りたる穴を池になすも辨才天を勸請するも乙女の淚に狂人の平癒するも祖先が夢枕にたつも盡く難ずるに足らず、我れは唯先生が平日の調を變ぜしを訝るのみ。京傳が筆才を以てすら稻妻表紙は總まがき絹篩等より劣るにあらずや。

「堀出し物」は本文を讀む勿れ。自序及作者曰を讀んで先生が文を味へ。殊に作者曰の色懺悔を諷せし巧妙は餘人の摸すべきにあらず、明治文學のサタイアの上乘といふべし。

○新著百種第二號堀出し物の評　家々子

藤庵主人のに後るゝ僅かに五分更らに此の評文を受取りぬ見所ろ異れば共に掲ぐる反つて百種の景あり文字を粗かくするは恨みのあるにあらず後より來りて席の既に塞がればなり以て本紙面の繁昌を知るべしと編輯人謹つて白す。

總じて著書などを批評せんとするには前後對照し又は是と似寄りのものを採りて比較する時は巧妙と拙劣との自ら分明なるべし幾に新著百種紅葉山人色懺悔出づ全編總て是れ涙を染出せり著者曰く此編涙を以て主眼となすと知らず世人是を贖ふに涙を以て主眼とせしや否や今亦吉岡書店其第二號を發兌せり隨ふて之を見れば名ゴし負ふ饗庭篁村者のと加減表紙は緋塩金泥に引かへて將を標題に堀出しものと名けられぬさるからにぼり出しと有き玉ひしは俗受けのする爲めにか如何やら葛根湯の振り出しと間違へらるふなり成らば上の新著云々の看板も和洋湯種と直して欲しと口悪き友人は云へり併し僅か一帖の價が十二錢之れで頭痛腹痛は愚かコレラでも忌斷いらずとの効能書も御主人自らの御披露なり時節柄進方も御召し成されて飛喉の風邪を引かぬ樣御用心く扨て此編亦涙を以て主眼となす僕れ紅葉子の涙を賴ふて既に哀涙仕りぬ又も篁村先生の涙を賴ふては濟ぬまへから思はず酸鼻仕り候紅葉子涙を寫し篁村氏亦涙を寫す應老も若きも涙なりけり歟しかし先には悲しき涙を賴ひ今は嬉しき涙を賴ふ扨も扨も可惜涙の爲めに愚弄つるものよ梅露氣も自惚も取除けて人の眞似をしたきが病ひ思切て同目の展覽會脱き掌に貴社餘白を貸し玉はゞ標題に縁ある堀り出しもの、のる歟そる歟の筆の先きカチリと一山當れば僕も亦本編主人公と共に嬉し涙をお灑し申さん。

作者曰く此編紅葉山人と相談すと曰はぬ計り書き振り平生の御得意は序跋凡例の中に在りて全躰の文章を評すれば篁村先生一派得意の筆力なれども平生の如く輕妙奇拔の指摘に苦しむ之れ作者自らも氣を揉み拔いた處と云れぬ併し主眼が涙だから商賣違だよと御斷りが有りうに見ゆるが無ろ叱りの眞似して讀むに骨折る文章よりは餘程與床しく覺へぬ。

脚色は平易平凡格別榮へのあるものにもあらず其平易なる處こう此書の價ある處ならん是を紅葉子の涙に比すれば實に目出度し彼は一字一涙熱腸を絞りて泣く恰も梅雨に濕ふが如きか美にして艶なれども怜悧傷魂を免れず是は文於脚色に於て殊異を見ず然れども夏日涼雨の至るが如し苦に苦しむ折柄爽然熱沙を一掃し去るの筆力有難く存じます。

人物は主人公横濱四郎太郎。母某。柿崎伊右衛門。妻某。娘お調兄某。とは描寫拔彩頗る逸あり取わけて四郎太郎母子の孝心慈愛母の無き身に比べては斯ふもあらふかと坐ろに感じを起せり柿崎夫婦さしたる離條ありとも覺へずお調の兄某當時の教育ある壯者簡明に寫されてお調の四郎太郎へ嫁する迄を助たり余は濟過し去りて只此人物に依て初て嫁すべき一の材料たるを知るのみ思ふに皆有ふれたる人物にして無下に卑しからぬ故大に此書の價あるを感ぜり然れども四郎太郎及びお調の寫法に至ては大に感服する能はざるものあり其故何如ん。

四郎太郎及びお調の縁は實に偶然にして其夫婦となり相互に相慕ふべき原由のなきを以てなり何となれば五十七葉に於てお調の言語應對を見るに理を辨し未見を知り其言語の確然たる到底片田舍の無教育なるものとは見へず假令教育あるものなりとも自ら夫を擇ぶは尋常なることにあらず然るを猶四郎太郎を慕ふべき原由を叙し來らで直に嫌ふべき發狂人を慕しむるは大早計にあらずや抑て本編主人公四郎太郎は是如何なる人ぞ皆て英才俊秀なるを聞かず教育あるを聞かず僅か知る處のものは母に至孝なるにありと雖も彼既に狂せり彼已に田夫なり野人なり此方は諸侯に仕へしものなり怜悧なるものなり都の手振を知るものなり然るを著者が四十七葉の僅かに（姿ばかりか心まで麗しく）の十數字を根抵として五十七葉の大波瀾を湧き遂に之を一身同体の夫婦として嬉し涙を濺さしむるものは余の思はざる處なり然れども余は才子醜婦と佳人癡漢とは相伴ふ者ならずとは云はず伴ふべき原由を寫し出さゞるを慊む殊に都より立歸へる少女が遂に發狂人を捕へて泣き口說く如き（四十九葉）は何人も少女の心底を解する能はざる可し余の考へにては此編を此儘殘ぜんとするには五十一葉（錦を飾り）の句より（憐れなるものよ）の句を最初にお調の人情に訴へ然る後に五十八葉（一枚皆から）の句を以て之れを助け又或は四十九葉の景狀を釣合よく配置せば後の五十七葉に至て大波瀾あるも猶且幾多の光焰を增すべしと思へり然らざれば女主人公を傷け主人を貶す少ゝに非らざるべし。

尙余は思ふ少しく主人公の氣格を高めたしと此書に於て見る處は宛然一個の正直なる田舍漢のみにしてお調の慕ふべき脈絡なき樣に見受らる。

然しながら六十三四五六に於ては平生御得意の妙筆面白く覺へたり此處に幾多の理由を幷べて遂に遺憾なくお調を探らせたるは余未だ此月下氷人を慊みとするなき能はず六十九葉の（模樣華美しく緋縮緬へ金泥にて）嗚呼あらずもがなお調の心にも……序ながら三十八初行（欣ゝ）は無用の如し悄ゝに贈賂するとは云へ。

以上の門目評は如此稱賞むべきも淺山なれど不取敢要點の疑に御示教を乞ひて筆を擱く。

雜錄

○讀加藤博士の女學生心得

鈴木弘恭

女學雜誌第百六十六號に加藤博士が當今女學生の心得といふを載せたりこは過日明治女學校の文學會に博士が演述せられたる大意を筆記したるよしなれども細かに讀みもてゆくに其意の懇切なる其論の至當なるさすがは老宿儒の言にしてその味あること經驗淺き壯年輩が辨に任かせて女子教育など西洋の受賣りを喋々するとは同日の論に非ず博士の論は經驗上より實地上より及ぼして云はれたるにてふと平凡の如き說なれども方今の日本社會にては尤も適當なる高論といふべし壯年輩の喋々する其論は高尚なりと雖も未だいふべくして行はれざるは所謂雨中に月を慕ひ秋日櫻花を見んと欲するの類なり是れ其時機を知らざるなり凡社會風俗の進步するは他の器機などの如く急遽に變化すべきに非るなり却て急速の進步を願ふは害ある事を覺ゆるなり。

博士の此高論や唯女生徒の心得のみならず志あらん父母は我が愛孃を教育するも恒に此にありたし各女學校の教員が生徒に於るも又此意を斟酌して教授あらまほし余頃年二三の女學校に出入して教授を司るを以て此の高論の如きは等閑に見過すを得ず余が常に想像したる所も又此の高論と大同小異なれば此に贊成を表せざるを得ずこは當今の女學生の心得には最も適當なるものと云ふべし。

因に云學問に道德的と器機的との二あり未開化の社會に於ては兎角に器機的の學問を貴ぶべけれども眞開化の社會に於ては道德的を愛せざるを得ず當今我が國の學問社會も器機的と道德的とを比較すれば器機的その多數をしむるなるべしさてその器機的とは何ぞ其人その學術にのみ長じて其學術を以ては人の師匠たるに足ると雖も其品行の點に至りては大に間然する所あるをいふなり。

その道德的とは何ぞ其人の學術品行兩ながら人の師範たるに足りて聊かも間然する所なきをいふなり今男學生社會を見るに然るべき高等の學校に在學し遠からず卒業して人の師範たるの身にありながら品行も方正ならず仲間の交際などに於ては言語粗暴にして假りにも道德仁義の談を聽かず是を以て勇壯活潑なりと心得るもの〻如し此の風習今や女學生社會にも波及せんとす亦愼ざるべけんや。

さて此の社會中一日も欠くべからざるは道德なり三育中尤も重ずべきは德育なり智育の如き躰育の如き有用なるにもせよ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

道德ハ人母ならん女學生等ことに重ぜざるを得ざるあり頃日女學校に關係して種々の惡說あり果して世評の如く甚しき事ハあるまじとハ思へども畢竟此の如き惡評を受るは其の女生徒中の不幸にして二三の不品行者やう〳〵我が才智の進步するに從て生意氣にも我が父母を愚弄し輕蔑するの念慮より起りたるの過失といふべし尙此事に付ては聊愚考あれども是は他日に於て云ふべし。

○百年の痼疾　みどり

百年の痼疾深く骨髓に入れるときは治療の法決して容易からず、或る時には頭痛となるなり頭痛を醫やし去れば乍ち痼氣となる、又或る時は寸白となるなり、寸白を療し去れば乍まち持病の癪となる、淸盛睥睨して枯骨を罵れば枯骨合して一大頭となり、宮本無三四寶刀を揮つてハッタと切れば幽笑カラ〳〵として頭上にあり、前に滅する時忽然として後ろに現はれ左に亡ぶるとき瞬たく間に右に躍る、是れ其の根底の眞元を絕たざる時の現象なり。今や女子高等敎育の反對論となり、婦人投票權の異論となり、一夫一婦制の故障となり、女生品行の惡口となる、其の代るゝ現はるゝ所ろ一々異なれり、而して其根當に一。若し人類として男女を同一視するの見あるを得ずんば百年の痼疾を去る決して望む可らず。而して男女不同等の僻見は亦是れ一大病の現兆に過ぎず、此の大病の發する所ろ、或は君臣の隔絕となり、或は官民の懸隔となり、或は奴隷と主人となり、富者と貧者となる、揔べて此れ同一元の病疾あり。

○入るゝ箱の進化　みどり

むかしの箱は閨門の內にてありし、中頃の箱は一家門の內にてありし、此頃の箱は賢妻的の敎育と云ふとなり、西洋今日の箱は女子に選擧權なしとの定め是れ也。箱の形ちは古今東西に各々異なる、然れども其箱に入れらるゝとは古今東西に皆な同一あり、孰か古へにのみ箱入娘ありしと云ふ今日の日本婦人も亦箱入娘なり、西洋現今の婦人も亦た箱入娘なり、但し娘ならぬもあらん左れど皆な均しく箱に沒す。嗚呼揔べての箱を全く打破し去るは夫れ何の時ぞや。

○威張て見たが悔るは是れ君子なり　輕快子

さる日紅葉山人を見る。紅葉我を罵て曰く陣中の妙藥と云ば東照宮の秘傳と心得何某寺の灸治と申せば大師の御夢想と早合點する世の習ひ文壇にも及ぼして好色と冠せしは元祿時代氣質とあれば八文字屋ものと知ッタカ振は片腹痛き事あらず

や包紙にて能書は知れざるに足下小説ぎらひにてありながら本文をも讀まずに外題考ナンゾと高慢の鼻うごめかすハそもや天狗に魅せられしかサァも不便と嘲けられ我れヤッキとなりしが面に忍辱の色を見はしヽレ紅葉殿鎭まり給へ達人は大觀し識者は多識せず我れ苟くも鈴類を事とす豈に十知の方なからんやされぱこそ其奥を窺はずして既に三略を悟る文界の北條早雲とも云はるヽなれ御身が如きエセ者に尻込をなす白痴にはあらず已みね／＼と落付拂へば紅葉鼻のさきにてへヽと笑ひ一寸法師は身の丈を知らず舌短かきものもシセロを氣取る鶴はおのが美に傲れど脚の長きを悟らず鴨は水に揚々たるも脛の短かきを恥ず足下些しのエセ文作りて大天狗となり澄す是れ楚人が呂に入て禮を知ると云ふに等しく其氣の毒さ押量られて憐れなりイザヤ我れ照魔鏡に化の皮を顯はして呉れんと勿躰振の咳ばらひして足下百六十二號外題考の中に妾氣質（其碩）とせしを忘れしか是は和譯童子とありて音にも聞きしならん彼の上田秋成の著にして文脉も外題も其碩に摸せしものなれば讀人一見して是を其碩といふ喰へども昧を知らず讀めども秋成たるを悟らざるものヨモヤ文界にはあるまじと思ひきや足下が如きウッケ者ありとはト尻尾を押へられてヤウの音も出ず是は誤植と誤魔かしも出來ねばグット落付顔に澄して曰く聖賢は世と推移り雀も海中に入ば蛤となる我れ俗塵に陷り俗客に交る衆人皆是を其碩と云豈殊更に秋成と博識を矜んやトハ云ものヽ實は……と云ふわけ悟られしかと我れ獨り合點顔に是は内々語り給ふな御他言御無用々々々。

右の次第に候故「百六十二號外題」と題する中の妾氣質（其碩）とあるは上田秋成と改むべきなり。秋成は安永中の人、和文學者にして莊重典麗の文字に富む、著す所雨月物語あり。當時其碩の著洒内を風行し秋成も其顰に倣て妾氣質を作りしなりといふ、和譯童子と作名あれば或は唐山の小説を譯せしものか。

〇初夏のあかつき　　かすみ

夏のあかつきほど心地の只ならぬはあらじ敢て怠ると云ふにあらず昨夜をそく迄で讀書せしとて今朝久しく起きず朝日は快ちよく窓に竹影を映じ雀はすでに何處へか働らきに行けり市に出る人々もすでに出て去りしか街上寂として聲なし徐むろに机上なる古人の文を誦めば曰く、天に信天翁あり地にはあすならふといふ木あれば人にも此おのこありて彼の世にむかしより言ひ渡れる、

世の中にねたほど樂はなきものを知らで阿房が起て働らく

とよめる歌のこれが返しとはなくて

　はたらかで起て居る身の氣樂さよ寢ても阿房は物思ふ世に

とよめりけるを何がしの旦那は大きに此歌に驚ろきて物くさの藏人と召れけるより世にはなまかはの藏人ともよぶ事にあむ左れば此の歌の心は其の藏人ならで知りがたし只だ藏人も知らずしてやよみけむ

　寢てや樂起てや安き雪の竹

○銹れる弓　松の舍紋

或人甚だ良き弓を持て居ましたが。狩に行く度毎に。此弓を携へ行きて。未だ一度も傍らを離したとがありません。彼は之を以て。遠くへ逃ぐる小獸をも。近づき來る猛獸をも。屢く射止めました。それで此弓が非常に。彼の敬愛を博しました。或る日。彼は此弓を手に取り上げ。餘念もなく眺め居りましたが。人に語るが如く。弓に向てかく申しました。汝の容姿は余り粗末だね。汝の凡ての飾りは。唯光澤ばかりだ。然し最う少し飾りを附けても宜いぢやないか。これでは人が觀ても。決してかほどの良き弓とは思ふまい。左すれば汝の損ぢや。斯く語る中――イヤ然し能いとがある。私はこれから直ぐ汝を携れて出掛けやう。そして巧なる彫刻師に頼んで。汝の身躰へ綺麗なる畫を。彫り付けて貰ふ。アー我ながら善い考へをした。と弓を携へて出かけ。そして彫刻師に頼みて。精巧なる狩場の圖を。弓に彫り附けさせました。そこで弓はどんなに。綺麗になりましたろう？‥‥弓がどんなに。人の注意を引き寄せましたろう？弓は誠に驚くばかり。美麗になりました。弓の持主の喜こび。如何ばかりぞ。信に思ひやられます。彼は心から怡悦て言ひました。我が敬愛する弓よ。汝はなんと美麗な華飾を。附たではないか‥‥彼は急ぎ家に歸り。微笑しながら先づ弓を試みんと。やをら取上げ。矢をつがひ。腕に力を込め。今や滿月の如く引き絞らんと致しましたが。矢を發さぬにわはれ弓は眞正中よりぽつきと折れました。故に人も此の弓の如く。容姿を飾らずして。能く正鵠を失はず。其目的を達するべし。外面のみ美麗にしても。肝要の忍耐力を減じ。中途にて素志が折れては。何の役にもなりません。

○おとめロアーリー（獨詩和譯）　ヘンリーハイネ作　白石園主人譯

われ心いたむ。そはなにゆゑぞ。ふりにし時のものがたり。あはれや。あゝ今にわすれじの

あたり涼しく。空くれはてゝ。ラインの流れ。しづかなり。夕日に染みし山のいたゞき。かなたに一つ。火花のごと。

かしこの上に。乙女ひとり。あれ麗はしき。花の顔せ。飾りの玉。ひとしく輝やく金色の髪。金の櫛もてけづりつゝ。歌ふそのふしいとたへなる。いとたへなる。

灘をわたる舟子ひとり。心みだれて。あれうたてや。みさきの岩は見もやらで。

ひたふるに見る。山のいたゞき。
やよあの舟子。あの小舟。今ぞ波間に…………
いたましや。そは誰がなせし。乙女ロアーリーの歌のため。

○日曜日

ルードルフ、レエンスタイン作
き、み、譯

愛らしき、朝の鐘の音、遠き野をこえ、響する、―――世の樣、何んさ、此の日は靜かなる、斯く照り渡り、斯く樂しき今日！
牧者ふ人、羊の群にそひ休み、羊は牧場のそが上に、農夫等は、折目正しき、正衣裳、寺院をさして、今ぞ行く。
野邊も亦た、今日日曜日の祝者に、組入らばやさ、艷ある、絹の上に、つむぐ貝殊さ、思ふばかり、色緑なる野の露を、うれ、微かにぞ、輝せり。
さなり、鳥さえ、今日は際立て、優にやさしく、歌ふ樣、野や岡に咲く花の香も、今日は一層、立ちまさり薫れる、心持こそする。
して、風琴の調べ音は、朝の空氣に高められ、彼方に遠く、音は響く。われらは君を讚む、讚むる、盡期はあらじな！と衆人は拜み居る。

○神の惠

梢苓主人

空井を翔る鳥つばさ　氣に存へて氣を知らず
波間に躍る魚鱗は　水に棲て水を見ず
神しろしめす世に在て　神の惠みを知り得ぬは
魚や鳥にも異らず　貴き靈しきおしなべて
世に住む人の爭でかは　神の惠みに浴るべき
命の糧のみなもとは　神の惠のいづみなり
盡せぬ泉千代萬づ　世に住む人の爭かは
神の惠に浴るべき

天に輝く日や月や　地に生ひ出る草や木や
空吹く風や降雨や　神の御業の世の中に
仕つる人の爭かは　其の御惠に浴るべき
氣をうしなへる鳥獸　水に離るゝ魚鱗は
暫し得堪で死するなり　人も惠の神の世に
神を離れて背きなば　惜き命もなかるらん
昨ふも今日も幸ひに　過ぎつる事は貶なる
神の惠みさ畏て　朝夕神を祭べし

○病論は詞かけ

去る處ろにやはら出來庵とて文盲大才なる醫師あり變りたる名字かなと尋ねければ近所のもの丶異名にてかゝると間に合せると云ふ心じやと云ふ、此醫師何の病を見ても痰の療治ばかりしられけるに小賢かしき人尋ねけるはこなたの療治にはいつも痰の藥ばかり盛らせらるゝが夫にて濟むとかといへば出來庵云く中々奇に煩らひにても人間は痰にて死するものジヤと云ふ、彼の人痰にてばかり死するとは心得がたし然らば浮者れ醉狂して物でとあやまり死するも痰か如何にもへウタンと云ふ痰なり、或ひは喧嘩口論にて頭まを割られて死するも痰か夫れはみやうたんと云ふ痰なり、又は盜人などの掟にあふて死するも痰かされば大たんと申す痰なり、然らば川へ身を投げ頸くゝりて死するも痰か何如にもたん氣と云ふ痰なり、扨又おさあひ子の川狩などに水に溺れて死するも痰かそれこそじやうだんと云ふ痰じや、左樣に口がしこくのたまふが然らば夜道山道辻切追はぎにあふて死するも痰か、如何にも人毎によくつゝしむべき油斷と云ふ痰じやとよい口の出來

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

庵が答へた。

○能は嘘の種

千早振上加茂の神事能を毎年六月勤めけるに近郷の百姓はじめて見物しけるが連の者にいふやうは扨て〳〵能と云ふものは大きな嘘をいふとじやあの男は此村の庄屋の息子五郎作といふやつじやが是は平の宗盛ありとぬかし居つた。

○見た事もないが神鳴の太皷

神鳴の太皷は一つが十間ほどづゝあると云ふ扨て夫を張る皮が有かと云へば成程うその皮と云ふ皮じやと咄す中にニッコともせずに居て嘘をいふ男ありしが扨ても紀の國の名物ほどあつて大きな蜜柑のある所ろじやてんと八幡かはを鞠にけるほどのが有といへば座中興をさまし嘘もよいかげんに言つたが能い蜜柑の皮でした鞠が蹴らるゝものかと云へば成程鞠に蹴るのが御座る惣じて皆が文盲じや犬の皮でした鞠を犬皮といひ蜜柑の皮でしたを陳皮といふものじや。

京都　鄕の山人

○夫婦心を一つに致す

一日貴人等が集つて談次一人がドーしたら夫婦の中に平和を保つとが出來るだろうと申さるゝと場末の百姓：：サラバに候　私は妻を娶つて以來三十年夫婦兩人が心を一にしたと云ふとはタッタ一日：：一度家が焼けましたとき兩人とも一生懸命我さきにと一の戸口に向て駆け出しました。

兒籃

○乙女亞利斯（四）　波月子

ヨダナは紅玉を確と懐中して筵の方えと下りましたがトある家の門口を通りかゝりますと家のうちにくるしさうな聲が聞えます聞もる火影に何者の住ひぞと伺ひ見れば一人の婦人病ひの床に息も絶ゆげにうめき苦るしんで居るノデス見れば貧家の様子軒も傾て壁も落ちあたりに幷ぶ家もなければ隣家の老婆が見舞もなく苦しみ死にゝ死ぬの外はありますまい無慘の事と思へばヨダナの心中には氣の毒と憐れの心が滿ちて靜かに戸を開て抱き起しさま〴〵に介抱いたしましたその甲斐ありてかの婦人はよう〳〵氣が附きあたりを見廻わしヨダナの顔を打まもり驚た様子デス　氣が附かれたと見える折よく門口を通りかゝり御くるしみの様子を見て御介抱いたしマシタがして御傍に御介抱あさる方は御いでがないデスカそれとも何か　病みつかれて居ります故御禮もようは申されません娘が居りますればアリスが　ソレナラば御娘子が御介

抱をなさるノデスカして御娘子はいづこえ　私は亞利斯と申す母の口から自慢のように御思召ましようが至て孝心な娘が御ざいマスが私がトロ〳〵と疲れに眠りましたうち里のモイソンと申す醫師の所へ趣きましたと見え枕元の藥の瓶も見えません夜分と申しもはや間もなく十時半キードの川を渡る事も出來ればよいがと心配いたし居うちに不意に痛の起りました爲め思わず貴方樣の御介抱に預りまして有りがたふ存じます　イーエどう致してダガ昨今御しやるキードの滿水と申すのは十時半で御ざいますか十時半で唯今九時半ソンナノ滿水迄は僅かに一時間此處よりその川迄は何町位の道程ですか　一里餘りでと云ふ語を聞くやヨダナの足は既に戶の外にわりました　失禮御免の聲は既でに一間も走り出した時に聞えましたヨダナの走り出し有樣の不思儀なるに茫然として魂を奪われたる亞利斯の母は暫らくは娘の事も忘れました軈て戶を暴らく〳〵しく引開て入り來るは娘のアリス、娘のアリスト思ひの外二人の盜賊病みたる人の用捨なく床の上より引おろし高手小手に縛めて家の中をかきさぐり軈て病者を引かつぎいづくともなく走せ去りました。

キードの橋に突立わがり多勢を相手に戰て居勇士のヨダナ。デシニーは間道より逸早く手分して一隊をヨダナの跡へ一隊をキードの川に扣へさせいまや遲しと待ちかけて居タノデス。ヨダナは追つ逐はれつ息をも次がず戰ひましたが三十六計逃ぐるに若かずと隙を伺て一足早く走り出でましたデシユーは是を見て腰より取出す短銃の狙を定めて切て放つに過たず可憐ヨダナは背らより胸を打貫かれました急所ですもの堪りませんその儘倒れてふたゝび起き上りません紅玉を奪ひ取れとの命令に走り寄らんとする小盜人ト見る一町餘り彼方より履音高く走り來るものあり見れば巡邏卒の角燈夜目には確とわからねど履音の樣子激しきを見れば四五人の邏卒はありぬべしと少し恐はげ立ちし折りしもキード川の彼方にて滿水には程もなし心せよとの號令前には邏卒後ろに滿水怎に憶病風が吹き出していそいで引かえしました後にはひとりガンバーと云ふ盜賊が林の茂みに樣子を先刻から伺て居りましたがその所へ來た者は孝女のアリス第一篇の樣子がこゝで詳しく知れましたろう。

此馬鹿野郎が、ナゼうそをついた。
ダッテお母さんが余りせくんだもの。
ナニ、せいたってうそをつくと云ふ奴があるものか。
デモ甘くをへるロマがありやーないもの。

史傳

○ブルータス及其賢妻　しのぶ

慷慨悲憤して事を成すものあり未だ必らずしも可ならず、冷々論釋して理を考ふるものあり未だ必らずしも可ならず、温厚優和にして君子の風あるものあり未だ必らずしも可ならず、鬱壯雄烈にして丈夫の膽あるものあり未だ必らずしも可ならず、若し夫れ巖ほの如くに剛たくして義を爲す而して能く心情を解せざるものあり、水の如くに洒々極めて愛すべくして而して尚ほ沈質剛强ならざるものあり、如此きは皆な一部分の英雄たり、君子たり、義士たり然れども未だ余輩が全たく理想友となすに足らざるもの也、彼の勇にして温たかく、威ありて優しく、深く熟慮して熱く動き、千軍万馬を引率して尚ほ能く哲理を研究するものあらば之れ尤も愛慕すべきものか、彼のマーカス、ブルータスの如き即はち其の一人たるなり。

羅馬の殿堂に列代の王帝の肖像あり、壯嚴にして勇まし、其間だに介して一の黄銅にて造りたるものを見る、手に劒を提さげて相貌如何にも凜烈あり、云く是れジユニアス、ブルータスと云へるもの丶、爲に建つ、之に劒を拔かしめたるは彼がタルクインスに打勝ちたる拔萃の戰功を賞し、其の精神の確としたる勇氣の熾んなりしとを形はせしものと傳す。又聞く昔し羅馬にセルビリアス、アハラと云へる義士ありし、時の執權者メーリアス窃かに非望を懐き、國家を奴にして其の擅權を收めんとするの企ありしかば、アハラ獨り刄を懐ろにして之を訪ひ、私しに事ありと欺きて一室に談じ、メーリアスの其の耳を傾むけたるとき乍まち之を刺殺したりと。而して彼のジユニアス、ブルータスを父統の祖先となし、此のアハラを母縁の祖先となし、シーザルが權勢極めて隆盛なるときに當りて、果してマーカス、ブルータスなる義士の起り立てるを見るあり。

ブルータス生れて既に勇壯武强の質を稟けたり、然るに動作靜雅、其の心情温和にして深く學を好み、夙に叔父にてありける哲學者カトーの風采を慕ひ、之が愛娘ポルシアを娶り、平生希臘の諸哲學を研窮する尋常ならず、特に尤もプラトの論を好みて其の蘊奧を覗がへり。

シーザル、ポムペーの權を相ひ爭ふや、羅馬の天下殆んど兩裂したり、四民或は右せんとし或は左りせんとす、歸向する所ろを決する容易すからざりしなり。抑そもポムペーは嘗て

ブルータスが父を殺ろしたるにより、ブルータスは之を怨みて未だ共に談笑したることあらざりし、而してシーザルがブルータスを優待すること甚だ久しかりしかば、此時に當りてブルタースがシーザルに加擔すべしとは万人の共に豫想する所ろにてありしなり、然るに彼は斷然として決すらく私怨を棄てゝ國家の公事を思ふは士らいの當に爲すべき所ろたり、今まやシーザルが破るゝは尚ほ可なりポムペーをして決して死せしむ可らずと、遂に身を挺して之に加はりぬ。斯て其のマセドニアに渡たり、一軍に將たるに當りてや、ポムペーと兵事を談ずるにあらざれば則はち獨り讀書し、暇まありと云へども敢て怠ることなし、夏の央ば炎暑酷烈にして天幕未だ來らず、諸人悉とく喘へぎ苦しむときと云へども、彼は尚ほ正午に至る迄で決して卷を離つとあらず、兵士皆な假眠するとき彼は麵麭一塊を口にして讀書したりき、夕涼一來兵士悉とく遊ぶとき、彼は即はち文章を草したり。

ブルータス既にポムペーに加はれりと云へどもシーザルは深く之を怨まず、諸將に令して決して之を害するなからしむ、而して万一危うきことあるときは惣ての計を盡して之を助くべしと訓示したり。　然るにポムペー遂にシーザルに勝つ能わず、フハルサリアの戰ひに大敗してポムペーは海に逃れ、ブルータスは沼に隱る。后ちシーザル禮を盡して之を招きしかばブルータス遂にシーザルに歸れり。

斯てポムペーは遂に死し、羅馬の天下悉とくシーザルに歸しぬ、百万の甲兵皆な其の一呼に應じ、萬國の寶物自づから膝下に集まる、此に於てかシーザル漸やく驕り、策士漸やく怨望す、カッシアス則はち機に乘じて密かに民心を搖動せんとしたり。　時にブルータスが祖先の肖像に、何物とも知れず一句を張りたるものあり、云く今まブルータスあらん乎、ナー今まブルータス生きてあれよと、后ち亦た無名にして書を投ずるものあり云くブルータスよ汝ち眠るか、云くあゝ汝ち眞のブルータスにあらずと、蓋し密かに彼を激せんとするものありし也。

カッシアス漸やく黨を集めシーザルを殺ろさんと計る、然るに同志者の多くは云く、若し吾黨にブルータスを得ば則はち可なり、若し彼なくんば決して事を擧る勿れ、たとひ幸わいにして事成ると云ども若し彼が賛成せざりしとにてあらば人皆な見て之を不義の行ひとなすべし、彼にして若し吾黨に長たらばたとひ事破るゝとも天下に辭はありと。　さればカッシ

アスは久しくブルータスと分爭したるに拘はらず、或る時之を訪ふて懇ごろに友情を通じ、談すでに酣なはにして慨然として曰く、

荷氏　ブルータス君よ、君來る三月一日の議院會に出席するか、當日シーザルが友人等彼を推して王と爲さんとすと。

武氏　然らばシーザルをして當日彼處に行かしめじ。

荷氏　然れども若し此事を吾等にも計るとあらば何如ん。

武氏　然らば之に反對辯論するのみならず、吾々が生命を犧牲にするも敢て羅馬の自由を保護すべし。

荷氏　然れども羅馬人は何如に君が死するを坐視すべきや、ブルータス君、君は能く自づから知るとなき乎、君が祖先の像に貼り君に書を密呈するものは多くは平民なり勞働者なり、決して羅馬上流の士人にあらず、彼等は他の官人に向つては送り物見せ物演劇等の饗應を惠まれんことを願ふならん、左れど君に向つては暴君を廢するの一大事を要求す、此れ君が家の代々四民に負ふ所ろの責任ならずや、君にして若し君が當に爲すべき所ろ彼等が正に君に要むる所を爲さば、彼等は則はち如何なる困苦辛艱をも堪へて君の爲に勞働すべし。

時にリガリアスなるものあり、鬱々として病む、ブルータス之を訪ふて慰さめて曰く、足下今の時に於て病む何ぞ不幸なるや、リガリアス蹶然として起つて曰く、若しブルータスにして余を要するとあらば余は直ちに癒ゆと。ブルータスいよいよ心を決したり。

嗚呼天下を横領したる一大獅を撲つと決して容易からず、密々に徒黨したる若干の人は皆なブルータスによりて動く、ブルータスが責めや實に甚大なり、彼れ氣を勵まして國家の爲にシーザルに怒る、時に亦た其友情によりて彼が爲めに泣く、若し夫れ公衆の口前に立ち、晝間公けに事を執るときに當りては、彼れ能く其の衷心の苦を隱して談笑平常の如し、然れども既に家に歸り、時に夜に入りてよりは、ブルータスも亦た前日のブルータスにはあらざりき。

小說

○酒鬼

藤蔭主人

前回も休み又今回もと重なりては看客もなにりをさきてはり給はんが此頃來の不快に犯され苦惱呻吟中殘念さ思ふ計が胸の山ひたすら御ゆるしのほど願ひ參らす　十六日

○あるのん物語（其六）

美妙齋 たより 合譯

やがて氣が附けば前に階子段から落ちた時、私は貰い腕輪を無くなしました。で、父に請ふて允可を得、それを探しに一先父の前を下つた。と言ふのは實は嘘で、その實そンな腕輪など私は持つて居たのでは無く、たゞあせなすを見たいばかりでそれで斯うこしらへたのです。

行つて見ると、あら、あせなすは常なら沙漠に居る大きな黒い獅子の上に腰を掛けて熟睡て居ました。その風惰岩の上に雪が掛つたかのやうでした。

急に喜び叫ぶを恐れて私は窃と近づき、その額を甞めると處女は目を覺ました、春花が咲くやうに。そして微笑をふくみました。

私は持つて來た酒とパンを出し、「このとほり酒もパンも有るから御上がり」。

しかし私が食べなければ處女も味ひません。われ〳〵は打連れて食べる、それをば獅子が犬か何かのやうに静にして見て居ました。

これから四十日間といふものは何うにか角にか下へ下りる言草をこしらへて私はあせなすの處へ來ては之を養つて居ました。

やがて四十日過ぎると、私の父親はあるくの窓を明け放つて、水が引いたかどうかを見るために鴉をおくり出しましたが、しかし鴉は終に歸りません。

それから鳩を放ちましたが、まだ棲處が無いと見えて歸つて來ました。

七日過ぎてふたゝび鳩を放つて見ました。歸つては來ましたが口に橄欖の葉をくはへて來ましたから既に水はいくらか引いたと父親も推察しました。

更に七日過ぎて後また父親は例の鳩を放つて見ましたが、今度は歸つて來ません、陸がもはやかれこれ多少あらはれたと見えて。

それからわれ〳〵一家は咸そろつてあるくの窓から遠近を見過して居るところへ、天から神の聲が聞えました。で、われ〳〵は恐れおのゝいてはつと下へ平伏しました。

そして神はすべて入用な物を持つてあるくから出てもいゝと命令しました。

畏つて父ののあは一家眷屬を伴つてやゝ出掛けました。が、私だけは何か胡麻化してわざと少し後れ、やがてあせなすを

呼んで來て外へ出ると、はたと父に見付かりました。

父ばかりか一家眷屬、すべて皆驚いて不審顏するばかり、言句も出ません。

また私も只恐れてふるへて居るおせなすを片手で抱いたばかり、何も言へません。

が、終に父親は極めて烈しい聲に罵つて、そして目をいからして、且つ手をおせなすの方に廣げて、「女め、どこから來た?。」

けれど恐れて居るばかりのおせなす。代つて私が口を開きました。「これがおせなすで――私がつれてまゐりましたので。」

「御前も」、父は言ひました、「長い蟄居で心が變にあッたな。乃公が知つて居る、この女は獸と一途にわるく這ひ込んでそして獸と一途に居たのだからやッぱり獸同樣に取り扱ッていゝのだ。」

更におせなすの方に向ひ、

「きりく立てィ一刻も快、快くッ。」

しかし面を上げ得ずに聲高く泣き出した少女!

立ち寄ッて少女をおぐさめる私の肘には父親も大にせきたちました。 たちまち私とおせなすとの間を引き裂きにかゝる、私はまたそれを邪魔する、そは父も嵐をふく丈空のやうな顏になッて私をにらみつけ、「畜……畜生め、貴樣まで。永劫罪は免れぬぞッ。 貴樣が鋤けば地も汚れる、飲めば水もまた。 地も水も貴樣を罰するから。 雨を得ぬ草の枇全前、萎えてしまふぞ。」

が、私は突立ッたばかり、動きも動もせず……

飽足らず父は更におせなすに食ッてかゝらうとして手を出しましたが、私も今は一生懸命、ぐつと此方へおせなすの身を引き、「私をば何とでも仰やい。しかしこの女をば。」

父も仕方なく止めてしまひました。しやふエすに倚れて默然となッた躰、眷屬そろつて慰めに掛りましたが、しかし誰も私には何とも言ひません。

○眞才子　上卷（續）

東都　麻溪居士作

其翌日からは何事も手につきません。寢ても起ても其事ばかり思つゞけて居ましたが、どう考へても墨ばかりで紫色の出やう筈が有ません。すでに仕やうとする事が間違て居るのですものを。八日の日も空しく過てしまいました。殘つて居るのはたつた二日です、――心はせくばかり、思は亂れるばか

り、少しも考へはつきません。

ア、實に戀と云ふものさへ知らなければ、此樣に苦しく思ふ事もありますまいに……、若し此難題に答が出來ない時は……、日頃戀ひ慕て居る人を、思ひ切らねばならぬかと思へば、實に腸もちぎれる樣です。知てる人に相談しても、後でそれが知れた時には、私の心に耻る事です。まさかに人に聞く譯にはいきません、が何位智慧囊を倒にふるつても……出るものは溜息計りです。

九日の夕暮です、私は餘り考へつめて精神もうつとりしてしまいましたから、もうとても考へられないものとあきらめて、一人で星ケ岡の公園へ散歩に參りました。まだ櫻は咲き初みませんが、散り殘つて居る梅の香が、そよ〳〵吹く風に揉れて、慰め顏に吐く香、誠に心持が宜くなりました。私は「ベンチ」に腰をかけて四方を眺めますと、人影は見へません。ひつそりしたものです。若しひよつとかすると、柳を背逐た人が出て來るかと思はれる位です。此ひつそりした處で、心を靜めるとまた今迄の考が浮んで來ます。浮めば花といふ名ばかり、緣の遠い梅までが思の種です。私の師匠がわざ〳〵其娘の名に因んで、白蓮を出したのが一層の恨です。恨しさに悲しさが加つては、いらざる故鄕の叔父の事などが思出されて。氣を晴す氣で來て、却て氣を腐されて歸る譯です。二三度自分で其事を思ふまいと斷念しても、花子の容姿や笑顏が、目の前に浮んで來て、どうしても斷念されません。――世の中に戀をするに、私ほど苦んだ者がありましやうか。

日はもう入りかけました。私は溜息つきながら、溜池の方へ下りて行ますと、恰度夕日が空に映じて、深紅色に染め出された雲の色が、溜池の水鏡に映つて居る鹽梅、――此紅色の雲――。私はつと眼を留めて其色を見ながら思はず。――(有難い神樣)と――我を忘れて――

△「お前ほんとに墨ばかりで紫の色を寫したのだね、ほんとうに……繪具はつかはないね、

「ほんとうです、……きつと、

△「もう其繪は書てあるのだね、あの繪絹に、

「エ、、ちやんと書てあります、

△「此處へ持て來て御覽

「イエ、あの四疊半までいらしツて下さい、……ちつとも動さ

れません畫ですから

△「大層六ケ敷い畫だね、‥‥どれそんなら行て見やう師匠は這入てまいりました、私はちやんと花を繪絹に墨で畫て置て、机の上に置ました。師匠は戸を開て這入て見ると、机には二輪の白木蓮に、一輪の紫木蓮が、立派に繪絹の上に顯れて居ます。喫驚した師匠の顔付、恰度三角形の目、圓錐形の口。

△「お前は紫の繪の具を使用たね

「イヽエ、使用ません、

△「だつてあんなに、絹の上に溢れた様になつて居るじやあないか、

「イヽエ決して繪の具は使用ません

△「だつてあの色は‥‥、慥に紫、

「なにしろ紫色の花は顯然紫になつて居ましよう。

△「ム、‥‥夫や紫になつて居るが‥‥、

「若し繪具が使用てありません訳は‥‥、

△「前に言た通り‥‥どうでもしてやる、

「きつとですね、

△「きつと、

「じやあお花さんと、あの、

△「ム、‥‥無論サ、‥‥でも繪具が使用てあるじやあないか、

私は笑ひながら、前の窓の障子に挿んで有つた、紫色の硝子を取れば、花は三輪ともに元の白色。今迄は太陽の光線が、此紫色の硝子を透して居ましたから、紫の色が繪絹の上の花に落ちて、立て一足隔つて見れば、まるで紫の繪の具が其上に溢れた様に見へたのです。繪師は口を開たまゝ、私の顔と、繪絹の上の花と見較べて、一言もありません。暫くして、

△「實に驚いた、お前はどうして此事を考へ出したのだい、

「實に私も貴下に承つた時には、殆んど考も付ませんでした、が昨日公園へ散歩に行て歸りに、溜池の邊を通りますと、恰度夕方でした、私は水の上を見ますと‥‥紅い雲‥‥が水に映つて居ました。そこで私は‥‥水はもと無色なので唯其雲の色が映つて居るのですから、‥‥若し其間に紅い硝子を置て、夕日の光を透したら、やつぱり紅い色が水に映るでしよう、それと同じ理屈ですから、之はよい事を考付たと、すぐに硝子屋へ行て紫色の此硝子を買て來て、とう〳〵出來上つたのです、

△「實にうまい、お花がお前の事を思つて居て、すでに此間も

他へ縁付けやうと相談をしたら、承知しないから、一ツそ の事お前を聟に仕樣と思つたが、直にするのも何だか妙でないと思つて、そこで此難題をお前に、外事にして頼んで才を試して見たのだ、もうお前を聟にするのは異存もなし、唯お前さへ承知して呉れば、……それでいゝのだ、

「ハイ……私は貴下さへ御不足なくば……（口の內で）實はお願申したいのです、

此時奥から來ました、娘のお花が――有情の花が

花「マア、あつさりした繪だこと、

△「ム、、此繪でお前が思ふ通りになつたのだ、

花「ナゼお父さん、

△「だつてお前の望みは、此畫できまつたのだよ。

花「此繪を書たのは、だれ、

言つゝ側を見ますと、私の臉の紅色、――さてはと……さすがにうつむく娘お花、――兩人とももぢ／＼……天井では鼠の聲チユー、師匠は繪絹を持て私の顏を見て笑を含て居ます。

されば此處であの無情の花は、それが却て有情の花です。

愛情は露の如く頓智は電の如し　（女學子）。

寄書

○學成りし女子の都に留るはよろしからず　秋洲鍵次郎

古人既に云へり江戸は青年學を爲すの所にあらず學成れる人の經驗を積むの場所なりと之を以て見るときは昔しも今も變らぬものと覺ゆ田舍は學ぶに設なく習ふに師なしとは地方青年學生の父母に出京を强ゆるの口實なりと聞く父老を瞞着するに足らん併し誤れるの言たるを免れず誰しも華の都へ出たきは人情、田舍に居ては人に後れを取るの思あるはさる事ながら東京へ出たればとて中々學問は無造作に出來ずそれのみか或は田舍に知りも得ぬ弊害即ち浮薄輕躁奢侈なんど云ふ數多の外物ありて是等は求めざるも親しくなり易きものにて二三年も過ぐれば學問は腦裡より飛出つゝあるに生意氣の風は身にしみ込み遂にしくじるもの其例し少なからずされば地方にて普通の教育を修め置き最早身に學ぶに師なきに至りて笈を負ひ京へ來るも遲からじ此年になればものゝ渉も付き身を誤るを免るべし開け行く世の今日なれば普通教育を修むべき校舍なき土地は非るべき也只一概に田舍々々と人に云はるゝを心耻かしと思ふはあしき考へにて民友先生も田舍漢とて論ぜられたり田舍人こそ却て國の寶なれ。

以上は男子に付ての說なり女子に對ては予は反對に勸めんと思ふ若年なる娘達は東京に學問を修むるに如かじ（評判よき學校にて）されど經驗を積むには却て地方を宜しとす何となれば地方には未だ女子に普通教育を教ゆる學校不充分にて志ある人には誠に遺憾の事と云べしされば年若き娘たちは東京に來るもよろし又女子は男子と異りて慎み深き性質のものなれば外物の爲めに心を奪はるゝ恐も少なかるべしされど茲に四五年の歲月學問を爲せば最早此土地に用なし此年頃となればまた樣々の事情ありて都には一種の惡風あるものなり此等には男子は格別心を引かされざるも女子の特性として此等の風には染み易きものなり是れ正直なる言にして婦人方のお叱りは予甘んじて受くべし又男子は政治家と爲るに付ても實業家と爲るに付ても經驗は最も必要にして此經驗は事物の繁雜なる都會ならでは爲し得ぬものなれど女子は斯樣な經驗は必要ならず互ひの交際も又家事經濟の樣子も此等の經驗は奢侈浮薄の風ある都よりは質素純樸なる地方にて爲す方利益あるべき也。

斯く說き來れば疑ふものあらん然れば志ある有志の男子は都に留り學成りし天晴なる婦人は地方へ引込めば互に利益する處なく好耦を得る事能はざらんと御心配御尤なれど予とても有爲の男子は悉く永く都に留れと云ふにあらず男子も既に得る所あれば地方の爲めに力を盡すを望むは勿論也六ヶ敷理屈を列ぶるにあらねど政權を中央に集むるの弊害あると一般學士識者の都にのみ集るは好ましからず

尤も或る學者の説かれたる如き條件を備ふる夫を得んには都ならでは叶ふまじ都も或所に限るべしされど夫とすべき人の標準も或學者の説の如きにも限るべからず彼れも又一個の説なるのみ之を以て地方に退けばとて良き夫を得られぬ筈なく今日早や既に都市人よりは田舎人を望む人の數多きにあらずや。然れども蘊奥の學理を修めん婦人達又は父母の都におはする人達は强て地方へ引込むにも及ばじ心を用ゐ惡弊の襲來を防ぐべきのみ只わざ〳〵遠く父母の膝下をはなれ海山隔てゝ此土に修業する婦人は學成り業遂ぐるの曉には最早用なき此地を見棄て地方に其經驗を積み玉へと勸むるのみ。

○舟中夏月　林　壺　臣

隅田川の月見んとて心知りの友どち打つれて舟河原といふ處より棹さして大河づらを夕汐とゝもに水脈逆（みをさか）のぼるに久堅の天つ空は月に障はれる雲もなくたゞ上つ瀬下つ瀬に渡せる橋のみぞ遠（とほ）じろき川の限には有りける、夜やう〳〵更けゆくまゝに月ます〳〵澄みわたり冷やかに打吹く夏の風は世の塵を拂ひ岸打つ浪の音は濁れる心を洗ひ、高どのゝ物の音（ね）に耳をすまして夜の更けゆくも覺ねず。月にうそぶき浪に浮かれ果てゝはたゞかたみに醉ひなきさへして心をやるも浮べる舟のなみならず水と魚との交はり深きぞちならんかし。

汗あえてあへぎしも今舟の中に
おもへばけふの涼にぞありける

時事

○高等女學校全廢の風説

今の風説は風の如し、吾人其の卒然として樹木を震動するを見れども、其の何處より來り何處に行くを知らず、故に吾人は第二回の風説として現われ來りたる彼の高等女學校廢滅の内決を信ずるものにあらず、左らばとて亦た全く之れなしと風説するの風説をも信ずる能わず。

○吾人は言ふ寧ろ全廢せよ

但だ率直に吾人が信ずる所ろを明言せば、寧ろ速やかに之を全廢するに若かずと言わん、抑うも政府に於て高等女學校を設立するの必要果して安くにある、他に高等教育を女子に授くるの學校なしと云ふが爲めか、見よ府下に於ける各種の宣教師女學校、及び明治女學校成立學舍女子部の如きすら倘ほ之れよりも高等なる學科を授くるにあらずや、然らば和洋を折衷し智德を兼備したる完全なる女子教育の摸範を造るが爲めと云ふか、左らば高等女學校の教育法抑々幾干の摸範を與へたる、世人は未だ之を承知せざるもの也、然らば則はち何の必要ありて政府は高等女學校を設くるや。　教育は政府の手を以て爲す事業中の最拙最劣なるものなり、故に吾人も亦た尤も自由なる尤も寬假したる眼こを以て之を觀察し來るに、倘ほ以て此校を存せざる可らざるの理由あるを發見せず、今日の日本は帝國大學をすら冷眼視す、安んぞ高等女學校を愛視するの餘眼あらんや。　大凡そ一私人が益なきの事を爲すとき人之を制するを得ず、政府が無益なる事をせらるゝときは其害や只だ無益のみにして終るものにあらざる也。

○婦人白標倶樂部

府下四十二番女學校の人工藤佐野、十三番女學校の人相良昭の兩女史は、此度婦人白標倶樂部と云へるを設立せられたり、其趣意書の終始に云く

我が國民の最短處は何なりやと問ふ人あらば妾等は之に答ふるに社交的の智識に欠乏せりと云ふを以てせん然れども國民の一半たる男子の境遇は今や新たなる萬般の交通機關を利用するとに依りて社交的の智識を攫め得るに至れり然るに獨り女子の境遇に至りては因襲の久しき猶ほ家外的の智識を求むるを許さず閨門堅く境を鎖し烟波空しく岸を打つ嘆妾等は朋友に後れたり今にして醒覺せずんば妾等は遂に朋友と相分るゝに至らん…………然らば之を如何せば可ならんか思ふに女子をして先つ社交的の智識を收得せしむるに在り女子をして社交的の智識を收得せしむるを如何曰く專ら社交に關する女子の倶樂部を組織するに在り社交倶樂部に於て得たる智識は敢て社交的男子の意に投するを失せざるべく之が好伴侶となり之が好助言者となるも之を勉めんには敢て難しとせざるなり。

今の日本婦人の社交上の智識なき尤も甚はだし、故に其勢力の到る所ろ及び其感化の及ぶ所ろ亦極めて乏し、吾人久しく如此き倶樂部の起らんとを欲して而して其の起すとの極めて至難なるを知れり。若し夫れ此會部にして其名詮自稱する如く常に白標をかざし、永遠に純潔清節の德を第一として運動するあらば、其の時弊を救ふに効あるや實に少なからじ、而して若し此の第一義を嚴守するとを得ずんば、寧ろ初めより其起らざるに若かず。

○日本服を何如んせん

佐々木豐壽子太田益男の二氏及び其他は日本女服改良會なるものを發起し、今や正に其準備中にして近日之を公けに發表せんとせらる、此會の主旨とする所ろは先づ和洋折衷の女服を新制し且つ時勢の必要に應じて漸次に改良し、衛生上經濟上便利上德義上美術上、成るべく相應したる服裝を本邦の女性に裝はしめんとするにあり、而して太田氏の如きは殆んど全二年を其工夫に消費し、今や數多の新

雛形を調製したりと云ふ。

○婦人矯風會副會

去る十五日婦人矯風會の副會頭を撰擧せり。此は兼ても記したる如く前會頭矢島かぢ夫人病氣にてたつて其任を辭退せられたるに付、暫らく副會頭を改撰するに止め、追て會頭を推撰するとなれば、元來甚はだ大切なる撰擧にてありし、而して投票の最多は第一潮井梓夫人、第二隠宮久夫人、第三佐々木豐壽夫人なりき。潮井夫人は別に平生長榮女塾を維持し、且つ此會の爲に既に矯風雜誌編輯の重任あるが故に今ま兩職を合せ受くるは固より堪へざるとて辭されたるが、尚ほ數日熟考の上にて確答あるべきとさなりぬ。抑そも同夫人が方正篤行なるは衆の服する所ろなり、而して其の老策も亦多く得がたきものと聞く、然れども若し止を得ずんば其一を棄て、副會頭の任を受られんとを切望す、百の貴懲は固より千の貴懲の犠牲となさゞる可らず。

○編者に與ふ

さかしらのなき名にぬるゝ袂をばあわれと誰か見てや欲しけん、無名氏は右の如き一首を惠送せられぬ、又未見の人奈良芳雄君は懇書を寄せて大ひに教示せらるゝ所あり、之より先き同じく未見の人依田雄甫氏亦書を寄せて勸告せらるゝ所ろありき、蓋し誣事あるにあらずんば人の厚情を知らず、生は此度の一細雛によりて深く諸女生、諸友人の信愛を謝し、亦深く自からの德の足らざるを知れり、故に其惡や寧ろ大なりさ云ふべし、之を以て今ま左の二篇を錄抄して此件の本末を明かにし、先づ之を諸君に謝し併せて自から戒しむと云ふ。

毎日新聞六月十五日紙上寄書

毎日新聞記者足下、近來諸新聞紙上に頻繁たる許多の風說に付て足下の感想せらるゝ所果して如何、生は今ま一例を擧て切に足下の注意を請ふ。

去る十三日夜生は横濱より歸社せり時に矢野次郎君より送附せられたる同日發行の江戸新聞中に「保護の深入」と題する一雜報を見たり其記事中暗に生が一身に關して言ふものゝ如しとは啻に矢野君の鑑定せらるゝのみに非ず故に生は直ちに左の書を江戸新聞社に送りたり、

今日の貴社新聞只今拜見仕候保護の深入の一項小生の身上に關するが如し何等の御間違かさ不審千萬に候へども必らずや其出所あるべし但只一層御探報を願ふしたく存じ候に付ては可相成は何時にても明治女學校へ社員御遣はし篤と御穿鑿ありては如何凡そ斯る事は可成實地最近の所に就て御探りの方可然と考候尚右新聞紙は明朝同學校内に公揭可仕存じ候に付ては最良きは其頃社員御遣はし下され校員生徒等が之に對する感想の何如なるやを實見ある事亦是れ一種の御探案方かと存じ候只今濱より歸社不取敢申入候早々不一

斯て翌十四日早朝明治女學校に赴き彼の雜報を張出して且つ左の如く附言したり、

近來女事に關する惡風評頻りに起るに付き兼て用心あるべき樣さの義は既に數日前にも廣告致置候處昨今日々の新聞紙に殆んど一二の斯る風評を載せざるなく遂に昨十三日の江戸新聞の如きは小生の一身に關して左の如く申すに至りしなり思ふに是れ小生の德未だ至らざるに由るとは淺からずと雖も亦以て當今の時勢を知るべし諸子幸に益す警戒する所あれ。

然るに同日江戸新聞社員の來訪せらるゝともなければ生は午後同社に行き編輯員さ承はる栗原競五郎氏に面談し氏に要求せし所は次の二點なり曰く彼雜報は投書なるか然らば之を見たし探報なるか然らば一層深く穿鑿あるべしと氏の答は畧するに次の六點なり曰く如何樣に取消し申さん乎、投書と申しても足下能く新聞社の事情を御承知なるべし、此へ足下の事とも明言しあらず、足下の事へ兼て承知もし、女學雜誌にても存じ居り、明治女學校の事は其知人の兒の通學するに由りて校則の嚴正なるを知れりさ。生更らに言ふ生へ新聞社の取消を望むものにあらず若し生に不德あらば之を取消すさも人へ然らずとすべく若し生に其事なくんば取消さゞるさも人へ信ぜじ此事果して生の一身に關する者にして而して其出處若し投書にあらずさせば之より更に一層御探報あるべし生へ十分に其穿鑿の便利を供ふべし」之にて生は歸社せり說は其再度の記す所如何によりて更に談判せんとを覺悟すれば也。

生が一身に關するの實歷如此し凡う風を捕るの言論は國家に益あり若し實に惡德ありさせば十分に彈劾するを可とす徒らに○△を附して事を曖昧に附するとを要せずと愚考す但だ願くは新聞社の事實を尋ぬるを更に一層深く且つ綿密ならんとを。

六月十五日　　女學雜誌社　巖本善治

○江戸新聞六月十八日紙上

○取消し　去る十二日の本紙上へ「保護の深入」と題し記載せし一件は元來何人の事に係るや知るに由なけれど其の事件の或人々の身上に似たるより迷惑さるゝ向もありとかにて本社に於ても再び事實の有無を擾らせしみ右は或人々の事にてはなく全く他にありし事實より遂に相似たる或人々の如く誤こゑしものなりと判然したれば該件は取消す。

○熊本縣下に無主義の下婢なし

熊本地方は九州の中に就て政黨の競爭最も甚しき所なるが同地方に於て下婢を雇ひ入るゝにすら一々政治上の主義を問合す由にて主義なき下婢は殆んど雇ひ主なき姿なり然れば下婢にも改進下婢、紫溟下婢などの區別あり主義の同じからざる上は下婢も來らず雇主に於ても異主義の下婢に一刻も居ることを許さずとのことなれば從て下婢の仲間に在りても彼れは國家主義、此れは商人主義さ互ひに交際を異にせるの有樣ありさいふ。（六月十五日中外電報）

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○女　演　人

大坂の東雲新聞に、浪人宮地茂平安田好則の名義を以て左の廣告を爲したり、

吾黨思ふに政治及び社會上の改良進歩を計るに言論の功用は實に著大なりとす特に優美なる婦人の演說に至ては聽衆に感動を與ふると最も大なり吾黨茲に感あり婦人演說家五名を募集し上客の禮を以て之を優待す有爲の貴婦人請ふ至急申込あれ

略　　則

一年齡十五歲以上三十歲迄
一舊自由黨の主義を抱持すると
一志操堅定品行方正なると
一普通の學課を修め辨舌を能すると
　但吾等各父母妻子あり貴婦人請ふ安ぜよ

末文千鈞の重ありと云ふべし。但し今の志操堅定品行方正なる女性は他に種々の必要あり。

○ふぐつめ會

此頃熊本に於て世界第一の醜婦と迄高名を博したるお諸後家と云ふは（大に感ずる所あり）一二の同志の醜婦と協議の上自ら發起人となり熊本醜婦人懇親會を開設したり其出席員の資格は左の通にて一昨二十日開會の都合なりしとぞ但し本社には未だ電信なし。

一年齡の老幼に關せざる事
一欠鼻片眼等の不具者を除く事
一瘋癲白痴の者は出席するを許さず

○何れか秋に遭て果べき

元老院議官町田久成君の夫人、本年三十二、俗名智勢子、此度發心して尼となり、大和國添上郡佐保村の不退寺に於て佐伯泓澄和尚を戒師とたのみ、綠髮を剃除して墨染の姿となられしよし、東京公論は云へり。

○雲氣蟠まりて雷電發す

季候漸やくむしくさし、四面の空氣何んとなく不快、切めて一陣の淸風あれさ思へど反つて有や無やの風あり、此時に當つては天雲亦た枯燥淡々、邪氣の鬱積する所ろ霹靂閃電なくんばあらず。此のフトナシキ日本人に調子外れの事の起り來るとき、深く其病元を察せざる可らず。

○僞巧と拙誠

本月の都風雜誌に「僞はりにして巧ならんより拙くして誠なるにしかず」との論說あり、流し淺井柞女史の筆に成るなり、言論の着實高秀にして深く時弊に當るのみならず、其文章の質朴雅馴なる一讀し再讀して尙ほ芳香の掬すべきを覺ゆ、當今の女文に注目するものは當に一讀すべきの價値ありと信ず。

○ウィラード孃の風采

米國留學生津田梅治君東京婦人矯風會に寄するの書中に、ウィラード孃の人物風采を細記せり、云く、

先づ孃が着する所の衣類は誠に疎末にして通常女生徒の衣服よりも劣り手輕なる綠の袴と白の襟ある紋綃を戴き頭部より脚部に至るまで飾とては少しも無之實に其容裝を見ては當地大學校設立の際一時に五萬弗を寄附し寡婦孤兒を扶助する爲めに數萬弗を抛ちし人とは思はれ不申次に孃は頭に一本の白髮をも戴かず兩眼鮮明、雙頰少しく薔薇の紅を呈し其の笑を含むときは小さき水晶の如き美しき白齒の並列するを見申候其已に五十歲なる事は甚た信し難き程に御座候且つ孃か立居、擧動、言葉の用ひ方を窺ひ其座する所の位置及び其公衆を待遇する有樣を見候ては決して世界婦人矯風會々長にして博學高識の大名ある今日世界第一の女傑とは思はれ不申候其後屢々途上にて孃に面會仕候得ども常に同樣の疎衣を着け全く平凡の米國婦人に異ならず孃が住む所の家屋即ち世界婦人矯風會々長の事務所を見れば唯小さき木造の二階家にて誠に目立たぬ程なる疎末の建物に御座候人をして更に一驚を喫せしめ申候。

乍併其後屢々孃が演說を聞き孃が著述を見て其議論の高卓なると學識の深遠なるを知り屢々孃を訪ひて言語を交へ益々其賢成の女傑賢成の愛國者賢成の基督信徒たるを知り申候孃が傳論は日本の六彈の座しき斗りの威さにて世界中矯風會員より孃に送付せし寫眞を沢山列ね讀書の室には孃と志を同ふするものの寫影を懸め大に孃が徳を讃り更に孃が志を勵ますよしは孃が自ら小生に向て語りし所に候且會の兩三愛姉の寫影は孃が机に掛けありしを拜見仕候云々。

鳴呼此れ孃のウィラード孃たるゆえん也。

○歸國後のラマバイ

ナンナタ、ラマバイ歸國後の小報はすでに前號に掲げたる如し。近着の貸一手雜誌にラマバイ會の報告あり曰く、彼は歸國後直ちにボムベー府なるマラバイ會補助者に逢ひ、學校設立の場所を相談したるが、諸人の說一致したるに付之をプーナに設かず、則ちボムベー府內に設くるに決し、例の如く果斷勵行して直ちに一場を準備し、後ち一週を經て著名なる府民某氏の家に知人若干を集め、熱心に其希望する所ろを演述したり、聽衆大に感動し一人直ちに五百ルピーを寄附することを申出しぬ。　同時ラマバイが演述したる所ろは、此校元來憫れむべきの寡婦の爲に特設すと云へども、亦たすでに嫁したるの婦及び未嫁の幼女をも均しく教育すべしと云へり、而して最も近き來狀によれば、彼は既にバラモン宗派の一幼寡婦、三人の乙女の入校を以て開校したりと。

片々

○記章佩用允許　小松宮御息所賴子の方には今度獨國赤十字社より寄贈されし第一等記章佩用の義を允許せられたり
○白十字社の發起　越後國新潟に於て標題の如き社を設たりとう其目的は左の三項を確守し進で社會の弊風を矯正するにあり第一項猥褻せざる事第二項飲酒せざる事第三項喫煙せざる事とありたり。

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○華族女學校の工事　同校の工事は日本土木會社新家技師の監督にて已に本館だけは落成せしを以て此程檢査を終り目下外部の工事中なるが本月中に悉皆竣工を告ぐる由にて此の建築に費したる金額は八萬七千圓なりといふ。

○赤十字社病院の眼科　日本赤十字社病院にては醫學士保利眞直氏に依囑し毎週月水金の日午后より眼科患者を治療せしむることとなりし由。

○加藤錦女史　高等師範學校より幼稚園取調其他の御用にて三年前米國へ遣はされ近頃范ウエルスレー大學に學ばれたる加藤錦女史は左る十七日恙なく歸朝せられたり。

○建部秋琴女史　同女史は去九日青年絵畫共進會褒賞賜與式に於て一等褒状石印一類添(賞富百餘四季平安圖)を得られたり。

○大坂救民院設立　大坂の日野猶三郎氏外數名の發起にて同府下西成郡難波村字南河原に資金三千圓を以て大坂救民院を設け數十棟の長屋を建築し市街に彷徨する鰥寡孤獨の貧民をして三箇月若くは十箇月の期限を定め入院なさしめ三十錢より五十錢迄の資金を貸與し相當の商工業を授け其利益を食費に宛て殘餘金を積立て退院の節本人に附與し相當の營業に就かしむるの組織なれば大坂府に於ても此擧を贊成保護する筈なるが名護町の貧民家屋の撤去も近きにあれば今日此設けあるは時宜に適ふ慈善の處置と云ふべしと大坂より通信。

○德島高等女學校寄宿舍規則。　德島高等女學校には、今般同寄宿舍規則を定められたるが、其の重なる條條は食料は一ヶ月壹圓八拾錢とし、在舍生徒は實地に就き結髮、洗濯、炊飯、割烹、日用簿記等の事を習はしむる等にして、總べての條目を廿五條に分かち、頗取締方厳密を極めたり。因に云ふ本校は本年度の通常縣會に於て、寄宿舍建築の事を議決し、其の費用も確定したれば、目下其の建築の計畫中なり、右建築出來の上は、同規則により入學する生徒も多かるべく、又德島市外遠隔の地にあるものも、將來入學するには便利なることとならん。

○女史の留學　本郷區東片町寄留宮城縣平民山田鐵三郎の二女富子(十八)は學術研究の爲め向ふ五ヶ年間英國へ留學致し度旨去八日其筋へ出願せし由。

○黴毒病院の全廢　本郷眞砂町なる同病院は本月三十日限り全廢する旨去十七日折田警視總監より其向々へ訓令し其れと同時に黴毒檢査及び檢査に關する事項幷驅黴院監督等の事は以後警視廳第一局第五課に附し又黴毒檢査醫に關する事項驅黴院に關する事柄は同廳醫務部へ附する旨警視總監より訓令したりと。

○淨土宗の尼衆學校　同宗派の公會に於て尼衆學校を全國へ七ヶ所即ち東京西京山口福岡長野愛知宮城に設立するに決し教會區支校の附屬とし尼僧は勿論信佛の女子にして入校を志願する者は修業する事を許すと云ふ其學期は三ヶ年なりと。

○大坂梅花女學校　同校生徒前神松代、上代よし、砂田たき、ハンナギユリキ、立石つねの五氏には此度十一學年卒業せられたるを以て去る十五日同地土佐堀會年會館に於て卒業式を執行せられたる由。

○婦人大懇親會　景山英女は來月初旬を以て婦人大懇親會を大坂の新生樓に開かんと企て目下京都に赴きて同地の婦人を誘導中なりといふ。

外報

○女子絹業協會　北米合衆國政府より絹業奨勵のため保助金として毎年五千弗を給與する女子絹業協會は近頃其年報を公にせり此年報に據れば同協會の絹業は昨年中大に進歩し此比例にて益々進歩せば北米合衆國の絹業は啻に自國の需用を充すに足るのみならず尙ほ外國へ絹絲を輸出するに至るも甚だ遠きにあらざるべしとのことと。

○女子被撰舉權の有無　ロンドン州會の女議員論ありて數月前以來當地の上等裁判所にて當選の有効なるや否に關する訴訟中なりし此訴訟の手續は茲に省略して其要點を云へば今回初めて開設せる州會(カウンチー、カオンシル)に女子も議員たるを得るや否を決するに在りし此事件を受持ちたる判事の一人は憲法上の問題には明晰なりと稱せられたるスチーブン氏なりしが久しく判決を見合せて熟考せる後に女子に被選舉權なきものと決せり其理由に曰く「千八百八十八年の地方政治條例及び之れに關係する數種の條例に依るに女子は地方自治躰の公民たるを得るの明文あり又女子は州會議員を選舉するの權あることを明示せり然れ共被告(女子に被選舉權あることを要求する者)の論ずるが如く明文を以て被選舉權無きことを示さゞる故に推測は女子を除去するの精神に反對せざる可らずとは其當を得ず何となれば判決例に據れば女子は是れまで選舉權幷に被選舉權共に有せざりしものなれば若し立法者が女子に選舉權に加ふるに被選舉權をも併せ與ふるの精神ならしめば明文を以て從來の規則に對する例外を示さゞる可らず單に明文を以て選舉權を與へて被選舉權を與えずとの明文はなきが故に二權を併せて與えたりとは解す可らず云々」然れども判事スチーブン氏は此判決に對して控訴を許し其後被告は現に控訴したれば未だ此事件は終局したるにはあらざれども當地の上等裁判所にて合議法廷の判決は中々有力なる恐據たるべきものなれば法學者の一考を煩すに足るべし且此判決の後間もなく女子に被選舉權を許すべき議案を國會に提出したる者あれば其結果は未だ知る可らず。(補村俊平)

○希國皇弟婚儀　露西亞皇弟パーウエル大公(千八百六十年十月三日降誕)と希臘皇女アレキサンドラ(千八百七十年八月三十日降誕)と婚姻の大典は本月十六日聖彼得堡に於て擧行せらるゝ筈又右皇女は同十五日同府に入御あるべしと同十四日在露國本邦公使館よりの電報去る十五日到達せり(外務省)(六月十八日官報)

木村熊二、田口卯吉兩君序○關輪正路君纂著

女子必携 **今世ひめ鑑** 全一冊 賣價四拾五錢 郵稅拾四錢

凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵記載し有之候蓋し昔の「ひめ鑑」の重寶なりしことを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑も亦同樣に助けあることを想像し玉ふべし

佐々木豐洲女史譯

婦人言論の自由 全一冊 賣價八錢 郵稅四錢

右は婦人の言論に關することに付き切論せられたるものあれば姉妹方の必ず閱讀せらるべき價値あるものなり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

○基督教小說出版

池袋清風大人序○同志社學院神學生山本靜也君著述

證詞(あかし)の百合花(ゆり) 定價拾五錢。郵稅六錢。

○挿畫二葉紙數百二十片紙餘。

○趣向は哀れもの○主人公は少孃と父親○文章は言文一致○回數は十回○熱信ある少孃は頑固の未信者五人をして無限の生命に導びく、これが此小說の眼目。

右は流行の下等なる戀愛(ラブ)を寫したるものと同轍のものにあらず、千代の礎等に次で主にある愛兄姉の必讀すべき良書なり、弊店幸に出版の榮を得たり、乞ふ購讀以て信仰の一助となし給へ。但組合派教會の安息日學校教科書として購求の向へは定價の二割減

出版書林 京都寺町通二條下ル **河合文港堂白**

同志社大學義捐金の第二回募集取扱廣告

同志社大學義捐金 取扱期限は四月限りの處地方有志者にして當時募集中のものも有之趣に付き更に五月より十一月まで第二回募集取扱期限とし引續き取扱候間右大學設立贊成の諸君は多少に拘はらず金圓相添へ左の各社へ御申込被下度候

一金圓御寄贈の向は之を各社の紙上に其金高並に姓名を掲載し別に受領證を差出さず

一義捐は拾錢以上に限る

一第二回期限は本年十一月卅日を以て締切とす

報知新聞社　每日新聞社　朝野新聞社　東京公論社　東京新報社　改進新聞社　東京朝日新聞社　江戶新聞社　嚶鳴社　警醒社　經濟雜誌社

女學雜誌社　民友社　大坂朝日新聞社　大坂每日新聞社　東雲新聞社　大坂公論社　京都中外電報社　日出新聞社　京都日報社　神戶又新日報社

● **六合雜誌** 第百二號 明治廿二年六月十五日發兌

◎凡神教を論ず……浮田和民

◎神學の研究……ドクトル、オットー、ヘーリング

◎哲學研究法終極の區別（續）……中島力造

◎神言外に基督の神たるを證す（續）……ゼー、デー、デビス

●雜記●舊約聖書中人物の不道德●獨逸人ローテ氏語類○質問答義○靈魂は不滅あるを信ず（仁田桂二郎抄譯）●博士アルフレヒト、リッセル●ナインチンセンチユリー●廣告●定價一冊八錢○半年分四十三錢○一年分八十錢

東京京橋區加賀町拾一番地 **警醒社**

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案内

（郵劵十錢送れ 催促する勿れ 委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二 下婢 年齡廿歳より五十歳迄の基督信者を雇入度者あり

十五 召使 家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む

十六 召使 重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり

二〇 取締 基督教信徒にて年齡三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校の寄宿に寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者

二一 中働 年齡廿五才位にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

二三 下婢 官員にて家族九人程の薪水の勞を取る下婢壹人雇ひたし

●雇はれたき方（乙）

六 奉公 地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齡廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三 教師 栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし

二四 奉公 年齡廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし

二五 裁縫 裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし

二八 奉公 普通小學科卒業の者にて（年齡二十二才）産婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり

二九 奉公 年齡十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし

三〇 通辨 年齡 廿四歳にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり

三一 奉公 廿一二才のキリスト信者にて裁縫を教へ家内の手助けをなし四時間通學を爲し得る家に無給にて雇はれたきものあり

發兌

月					
六月。	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
七月。	六日	十三日	二十日	廿七日	
八月。	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
九月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。六錢　郵税。一錢（但府内無郵税）

十册。五十八錢郵税。十錢（同前）

半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢

一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢

同　三回以上　一割引

同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新肴町實明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田晏貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年六月二十日印刷
明治二十二年六月廿二日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY